

42313

教科書文庫

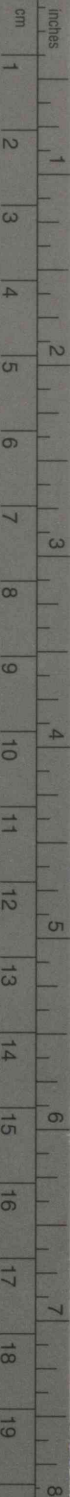
4
810
42-1933
200030/825

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

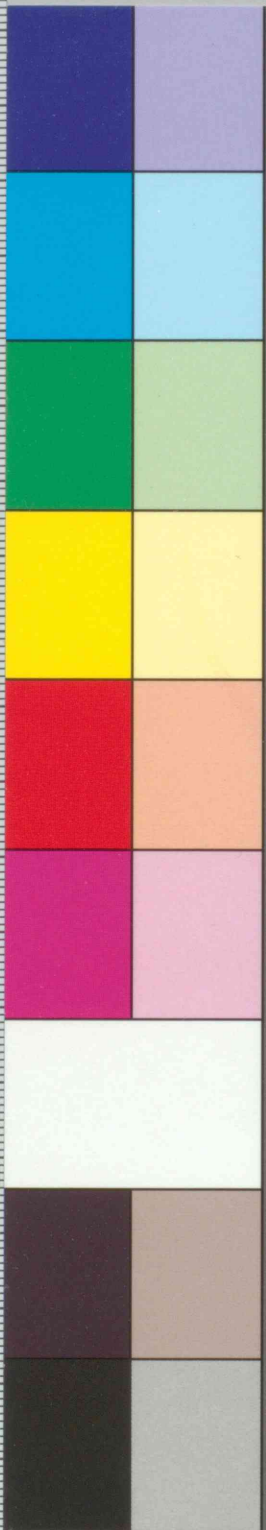
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



3759
I91
資料室



花子園遊本

明治十年九月編

巻目



375.9
Ig 1

資料室



純心女子國語讀本

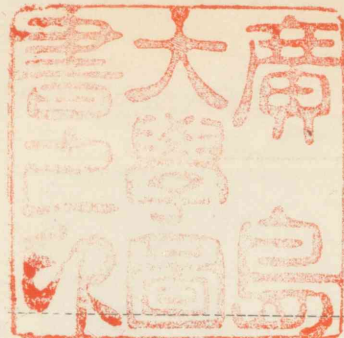
又學士 女子美術力編

早稻田大學出版部發行

慈母觀音 (狩野芳崖筆)



(五 狩野芳崖とフェノロサ)



慈母観音

明治に於ける日本畫復興の水先案内をなした名畫家狩野芳崖は、文政十一年長門國豊浦の藩中に生まれた。幼名幸太郎。家は代々豊浦藩のお抱繪師で、父董信は晴皐と號し、木挽町狩野家に學んでその姓を許された程の人物であつた。芳崖は夙くから父に就いて畫を學び、十九歳の時に江戸に出でて木挽町繪所に入り、勝川雅信に師事して、名を勝川雅道と與へられた。入塾の日から橋本雅邦と相識り、後年相共に天下に盛名を馳せたのも一奇縁であるが、フェノロサに識られたのを一轉機として、貧窮と胸の病に悩みながらもいよゝ精進努力して幾多の大作を遺したことも、繪畫史上の意味深き逸話である。晩年に至り、フェノロサ、岡倉覺三氏と美術學校の開設に盡力したが、願叶つていよゝ開校といふ日の四ヶ月前明治二十一年(西曆十一月)病革つて長へに逝いた。

慈母観音は永遠に繋がる人間の生命の神祕を描き、圓滿無礙な母性の清淨愛を具現したものであるが、畫面は極度に靜謐でありながら、作者の熱烈な信心の血が底深く脈々と波打つて人に迫るものがある。本文三五頁に掲げた「不動明王」もまた彼が名品の一で、形よりも精神を主とし、古畫に依據するよりも自ら解釋し得た大聖不動明王を描いたもので、人をして意志の權化、折伏の本尊たる明王の前に拜跪せしむるの概がある。いづれも東京美術學校の所藏にかゝる。

卷四 目次

一 明 治 神 宮	編 者	一
二 家庭に於ける禮讓	鳩山 春子	八
三 趣味の武藏野	國木田 獨步	一四
四 旅 の 歌 (歌)	(現代十歌人)	二二
五 狩野芳崖とフェノロサ	編 者	二六
六 夜 叉 王 (戯曲)	岡本 綺堂	三六
七 手紙観いろく	編 者	五二

八俗字と當字	藤井紫影	五七
九展望車より滿洲を	高濱虚子	六二
一〇ミレ一の晩鐘	岩橋武夫	七〇
〇一一風流閑雅の趣味	下田歌子	七九
〇一二蓑蟲に(歌)	落合直文	八七
一三備後壘	橋南谿	九〇
一四悔いて食はず	(二宮翁夜話)	九八
一五橋媛	編者	一〇一
〇一六俳句評釋	正岡子規	一一〇
一七ものの出端	杉村楚人冠	一二七

一八海 二 題(詩)

一 元旦の挨拶	白鳥省吾	一二四
二 月かゝりて空に	福田正夫	一二五
一九手紙 二 趣	編者	一二六
一 つゝじの一輪を封じこめて		一二六
二 京都にゐる婆やに		一二八
二〇 一樹の蔭一河の流	海上龍子	一三〇
二一 鬼作左の嬉し泣き	新井白石	一三六
二二 名君	菊池寛	一四二
二三 大川の水	芥川龍之介	一五三

- 二四 紅 (椿(詩))
- 二五 潜水艦上の或日(講演)
- 二六 春寒き多摩御陵に詣でて

- 三木露風 一六三
- 穂積律之助 一六五
- 九條武子 一七七



純正女子國語讀本 卷四

一 明治神宮

威靈を加へざるものなし。

或は槻、樺の並木により、或は蒲葵の叢林によりて、廣前を清め、神苑を飾る。

我が國の神社佛閣、樹木によりてその威靈を加へざるものなし。或は杉により、或は檜により、或は樟樹により、或は竹栢により、或は槻樺の並木により、或は蒲葵の叢林によりて、廣前を清め、神苑を飾るなど、舉げて數ふべからず。中には樹木そのものに神靈を認めて社殿を設けざるさへあり。随つて樹木の神社佛閣を莊嚴する趣致様式種々あれども、

國産の樹木の大多数を網羅せり。

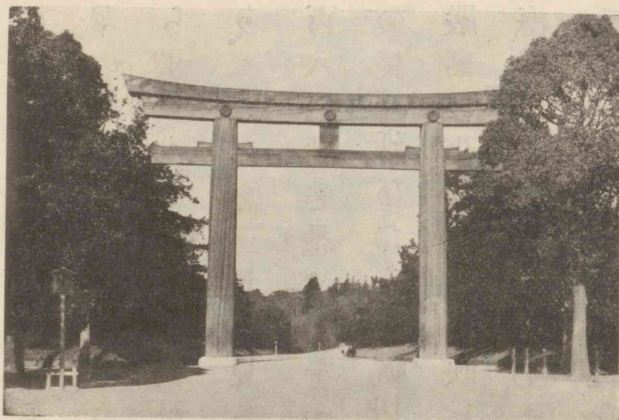
十數株の喬松の亭々として聳え立てる趣なり。

その様式の特種なる、明治神宮の如きは稀なるべし。殊にその趣致の複雑にして深き意義を含めること、明治神宮の如きは極めて稀なるべし。

明治神宮の神苑は、國産の樹木の大多数を網羅せり。而してその樹木の多くは遠近の臣民の獻納にかゝるものにして、中には赤子自ら遠く負ひ來りて植ゑつけたるもの少からず。かく種類の多く、精神的意義の深き點より見て、明治神宮の神苑は萬國に比類なきものなるが、殊に珍しく貴きは、神門の内、拜殿を正面にして、廻廊に圍まれたる大廣前に、たゞ十數株の喬松の亭々として聳え立てる趣なり。我等はこの計畫が、如何なる意義により、何人に考案せられた

我が特有の國土美を發揮したる點。

見よ、地上は一面の白砂に清め



明治神宮の大鳥居と參道

るかを知らねど、それが我が特有の國土美を發揮したる點より見、大帝を偲び奉る赤子の心を現したる點より見て、まことに恰好無上の選擇なることを歡ばずんばあらず。我等をして神宮に詣てしめよ。まづ清められたる參道を過ぎ、長き廣き道の左右に、寒、温、熱の三帶に互れる無數の樹木の、疎密さまざまに植ゑ並べられたるを眺め、つゞ、幾曲折の後、恭しく神門を入れば、見よ、地上は一面の白

られて、その間より、たゞ赤き太き長き松の十數幹の抜け出でたるにあらずや。而してその長き幹の頂には、翠の圓蓋美しくかざされて、神殿の檜皮を護り奉れるにあらずや。
二十八町四間
約三キロメートル

主役。

砂に清められて、その間より、たゞ赤き太き長き松の十數幹の抜け出でたるにあらずや。而してその長き幹の頂には、翠の圓蓋美しくかざされて、神殿の檜皮を護り奉れるにあらずや。それを三景に見るに、松島は名の如く松の島にして、八百八島殆ど悉く松をかざせり。天之橋立は二十八町四間の長く延びたる沙嘴、切れ目なくその綠色に飾られたり。嚴島は朱欄海水に映れる社殿のほとりを初として、周圍の海岸より彌山の頂上まで、到る所に、この常磐木を主役として、類ひなき風光の美を發揮せり。その他、瀬戸内海に羅布せる花彩列島より、須磨、明石、舞子、三保、虹、千代、もろくの松

凡そ風景の美に鳴る所、いづれかこの名木の韻致に負ふところなからん。

原、及び無數の湖畔、山頂に至るまで、凡そ風景の美に鳴る所、いづれかこの名木の韻致に負ふところなからん。

翻りて思ふに、



明治神宮の松
(川端龍子筆)

明治神宮の大廣前を十數幹の長松に飾れるは、國粹の樹木美を以て、齋かれませる神の御目のあた

他の樹木、皆神門の外に星羅して、たゞこの木のみを神の側近

りを装ひ奉れるにはあらずや。あらゆる他の樹木、皆神門の外に星羅して、たゞこの木のみを神の側近に奉仕せしめ

に奉仕せしめた
る。

たるは、全國の樹木が盟主たる名木を代表として、御傍に仕
うまつらせたるにはあらずや。根より頂まで枝葉の密叢
せる樹木により、御目路を遮らずして、赤裸なる長幹の高く
秀でたる木により、神殿をさやかに望ましめたるは、七千萬
の臣子が仰望の志を成したるものにして、同時に齋かれ給
ふ大帝の國土臣民を見はるかし給ふ大御心に副ひ奉れる
にはあらずや。大帝の御製に

高どのの窓てふ窓をあけさせて

四方の櫻のさかりをぞ見る

と宣へるあり。恭しく思ふに、大帝、この神境に鎮まりまし
て、廣き大御前のこの名木の長き幹の間より、内苑外苑に植

大帝、この神境
に鎮まりまし
て、廣き大御前
のこの名木の長

き幹の間より、
内苑外苑に植を
あつめられたる
樹林を見わたし
たまひ、寶物殿、
繪畫館、競技場
等のあらゆる設
備を見そなはし
し、延いては更
に、大東京を通
して、曾て知ろ
しめし大八洲
の光輝ある現容
を見さけ給ふな
らん。

るあつめられたる樹林を見わたしたまひ、寶物殿、繪畫館、競
技場等のあらゆる設備を見そなはし、延いては更に、大東京
を通して、曾て知ろしめし大八洲の光輝ある現容を見さ
け給ふならん。しか思ふは、畏けれども、國民に取りて、無上
の美しき想像にはあらずや、無上の心強き想像にはあらず
や。
松は日本の選ばれたる木にして、美容と、品位と、節操と、重
疊累積せる傳統とを有する樹木なり。今やこの名木を以
て我が大帝の大廣前を飾り奉る。我等はこの計畫の言語
に絶して實に意味深きを感じずんばあらず。

鳩山春子
教育家
共立女子職業學
校長
故鳩山和夫夫人
東京の人

文明の恩澤

品位と尊敬

二 家庭に於ける禮讓 鳩山春子(據)

私どもは自分自ら萬物の靈長と稱して誇つてゐるのでありますが、かく自稱する人類の中にも、非常に高尚な上品な人もあれば、また動物にも劣るやうな野卑な下品な人もあります。同じやうに文明の恩澤を受けつゝ、軒を並べて住まつてゐる者の中にも、高い卑いいろ／＼の相違があります。この相違を生ぜしめるものは一體何でありませうか。言ひ換へると、廣い意味に謂ふ人品の高下を定めるもの、どんな場合にも、自分の品位を保つと共に、他人に對する尊敬をも失はないといふやうな、眞の意味に於ける紳士淑

女の資格を作り上げる上に、最も大きな働をするものは何でありませうか。それは實に家庭に於ける禮讓であります。

法律と禮讓

法律は私どもに對して、かういふ事をしては他人を侮辱するとか、または自分の義務を怠るとかいつて、そのやうな行爲に對して制裁を加へるものでもあります。しかし日常の行爲について、一々具體的に善處の方法を教へるものはありません。そしてそれを教へてくれるのが禮讓で、禮

善處



鳩山氏夫人の銅像

Edmund Burke
(1729-1797)
イギリスの政治家、文學者。

氏より育ち。

習性となる。

禮儀は空氣と比較することから来る。

讓は朝起きるから夜眠るまで私どもの經驗するすべての事に就いて、わが人品を高め他の感情を和らげる道を教へてくれるものであります。英國の名高い政治家で且つ歴史家であつたエドモンド・バークといふ人は、禮讓は法律よりも肝要だと言つて居りますが、それはこの意味を申したのであります。

禮儀のない家庭に育つた子供は必ず不作法なものであります。諺にも「氏より育ち」と申しまして、世間には氏は良くて家庭が良くないために、習性となつて、禮讓の何たるかを理解しない、下卑た人間となるものが澤山あります。私はこの點に於て、禮儀は空氣と比較することが出来ると

人間生存の第一義。

思ひます。若し多人數集つた部屋の中に、窓を閉め切つて長く入つて居るならば、頭痛や眩暈がして、遂には倒れるやうになりませう。また大きな都市の人ごみの中に住んでゐると、身體が自然に衰弱して、遂には病氣に犯されるやうになります。これはその部屋に居り、その都市に住む者の始終吸つてゐる空氣が悪いからで、家庭の禮儀もこれと同じ影響を有つて居ります。のみならず禮儀のない家庭が濁つた空氣よりも一層恐しいのは、人間生存の第一義たる精神を腐敗墮落せしめて、すつかり人間を野蠻化させるからであります。家庭に於ける禮讓の有無乃至厚薄の感化は實に驚くべく恐るべきもので、それが自然の間に、間斷な

朱に交れば赤くなる。

く行はれるだけ、決定的に人間一生の運命を左右します。諺に「朱に交れば赤くなる。」といひますが、これは友を擇ぶ上にあてはまるのみならず、更に適切に家庭の空氣についていはれることでありませう。凡そどのやうな法律でも、また道德上の教でも、家庭の禮儀を基礎として立つてゐないものはありません。それ故、家庭の禮儀が廢れてゐるならば、どんなに立派な教を説き、嚴重な法律を設けても、その効果は見るに足らぬものでありませう。それと反對に、若し家庭に於ける禮讓が立派に行はれてゐるならば、別に高尚な教を説かず、嚴しい取締を設けずとも、自然に向上して、美風がおのづからその間に成

社會を大きな機械に喩へて。

世にこれほど骨折が少くして、効果の多いものはありますまい。

立ちませう。社會を一つの大きな機械に喩へてみますと、禮儀はちやうど、その機械を圓滑に運轉させる油のやうなものであります。その禮儀の本、油の源流は家族生活の間に行はれる禮讓であります。たゞ、「お早うございます。」とか、「今晚は。」とかいふやうな簡単な言葉の中にも、人の心を和らげる非常な力が籠つてゐるではありませんか。世にこれほど骨折が少くして、効果の多いものはありますまい。そしてちよつとした物の言ひやう一つで、これほど人の感情を和らげることが出来るならば、眞心からする禮讓の應接が人の好感を得、社會の美風を成す基本となることはいふまでもない

家庭の美風の源流は女子の心情にある。

國木田獨歩

明治の小説家

名は哲夫

千葉縣の人

明治四十一年三月

癸卯歿、年三十六

ことで、一家の主婦であり、また人の妻であり、母である者が、この點に就いて特に深く注意すべきは、更にいふまでもないことであります。社會の基本は一家であります。社會の美風は一家の美風を擴大することによつて實現することが出来ませう。私ども現代の女性は更に一步を進めて、一家の美風の源流は女子の心情にあるといふ信念の下に、自重努力して禮讓の美風を家庭に實現しようではありませんか。

三 趣味の武藏野

武藏野に散歩する人は、路に迷ふことを苦にしてはなら

國木田獨歩

必ずそこに、見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。

思ひつき次第に右し左すれば、隨所に我等を満足させるものがある。



國木田獨歩

ない。どの路でも足の向く方へ行けば、必ずそこに、見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。武藏野の美は、たゞその縦横に通ずる數千條の路を、當てもなく歩くことに由つて始めて獲られる。春、夏、秋、冬、朝、書、夕、夜、月にも、雪にも、風にも、霧にも、霜にも、雨にも、時雨にも、ただこの路をぶら／＼歩いて、思ひつき次第に右し左すれば、隨所に我等を満足させるものがある。これが實に武藏野第一の特色だらうと、自分はしみ／＼感じてゐる。武藏野を除いて、日本にこんな所がどこにあるか。北海道の原野に

林と野とがかくも能く入り亂れて、生活と自然とがこのやうに密接してゐる所がどこにあるか。

君の杖を立てて倒れた方に行き給へ。

は無論のこと、那須野にもない、その外どこにあるか。林と野とがかくも能く入り亂れて、生活と自然とがこのやうに密接してゐる所がどこにあるか。武藏野にかゝる特殊の路のあるのは、實にこの故である。

されば君若し、一つのこ小徑みちを行き、忽ち三條みに分るゝ所に
出たら、困るに及ばない。君の杖を立てて、倒れた方へ行き
給へ。或はその路が君を小さな林に導く。林の中ほどに
到つてまた二つに分れたら、その小なる路を選んでみ給へ。
或はその路が君を妙な所に導く。そこは林の奥の古い墓
地で、苔むす墓が四つ五つ並んで、その前に少しばかりの空
地があつて、その横の方ををみなへしなどの咲いてゐるこ

頭あたまの上の梢で小鳥が鳴いてゐたら、君の幸福である。

見わたしの広い野が開ける。尾花の末が日に光つてゐる。

小春の日の光が長閑に照り、小氣味よい風がそよそよと吹く。

ともあらう。頭あたまの上の梢で小鳥が鳴いてゐたら、君の幸福である。すぐ引返して左の路を進んでみ給へ。忽ち林が盡きて、君の前に見わたしの広い野が開ける。足元から少しだら／＼下さりになり、萱が一面に生えて、尾花の末が日に光つてゐる。萱原の先が畑で、畑の先に脊の低い林が一叢繁り、その林の上に遠い杉の小杜が見え、地平線の上に淡々しい雲が集つてゐて、雲の色にまがひさうな連山がその間に少しづつ見える。小春の日の光が長閑に照り、小氣味よい風がそよ／＼と吹く。若し萱原の方へ下りてゆくとしたら、今まで見えた広い景色が悉く隠れてしまつて、小さな谷の底に出るだらう。思ひがけなく細長い池が、萱原と林

白雲の斷片を鮮かに映す。

右に行けば林、左に行けば坂、君は必ず坂を登るだらう。

との間に隠れてゐたのを發見する。水は清く澄んで、大空を横ぎる白雲の斷片を鮮かに映してゐる。水の澗には枯蘆が少しばかり生えてゐる。この池の澗の徑を暫く行くと、また二つに分れる。右に行けば林、左に行けば坂、君は必ず坂を登るだらう。とかく武藏野を散歩するのに、高い所高い所と選びたくなるのは、何とかして廣い眺望を求めると、それでその望は容易に達せられない。見下すやうな



武藏野の農家

若し若者であつたら、帽を取つて慇懃に問ひ給へ。鷹揚に教へてくれるだらう。怒つてはならない、これが東京近在の若者の癖であるから。

眺望は決して出来ない。それは初から諦めたがい。若し君、何かの必要で路を尋ねたく思はば、畑の真中に居る農夫に聞き給へ。農夫が四十以上の人であつたら、大聲をあげて尋ねて見給へ。驚いてこちらを向き、大聲で教へてくれるだらう。若し少女であつたら、近づいて小聲で聞き給へ。若し若者であつたら、帽を取つて慇懃に問ひ給へ。東京近在の若者の癖であるから。怒つてはならない、これが東京近在の若者の癖であるから。教へられた道を行くと、道がまた二つに分れる。教へてくれた方の路は、餘りに小さくて少し變だと思つても、その通りに行き給へ。突然農家の庭先に出るだらう。果して

變だと驚いてはいけぬ。その時農家で尋ねてみ給へ。門を出るとすぐ往來ですよと、すげなく答へるだらう。農家の門を外に出て見ると、果して見覚えのある往來。なる程これが近路だなど、君は思はず微笑をもらす。その時始めて教へてくれた人の有難さが解るだらう。

眞直な路で兩側共十分に黄葉した林が四五町も續く所に出ることがある。この路を獨り靜かに歩むことがどんなに樂しからう。右側の林の頂には夕照が鮮かに輝いてゐる。折々落葉の音が聞えるばかり、四邊はしんとしていかにも淋しい。前にも後にも人影見えず、誰にも遇はず。若しそれが木の葉の落ち盡くした頃ならば、路は落葉に埋

四五町
一町は約百九メ
ートル。

折々落葉の音が聞えるばかり、四邊はしんとしていかにも淋しい。

梢の先は針の如く細く蒼空を指してゐる。

まさかに行き暮れて困ることもあるまい。歸りもやはり凡その方角をきめて、別な路を當てもなく歩くが妙。

白銀の鎖。

れて、一足毎にがさ／＼と音がする。林は奥まで見すかさず、梢の先は針の如く細く蒼空を指してゐる。尙更人に遇はない。愈淋しい。落葉を踏む自分の足音ばかり高く、時に慌しく飛び去る山鳩の羽音に驚かされるばかり。

同じ路を引返して歸るは愚である。迷つたところが今の武蔵野に過ぎない。まさかに行き暮れて困ることもあるまい。歸りもやはり凡その方角をきめて、別な路を當てもなく歩くが妙。さうすると思はず落日の美觀を得ることがある。日は富士の背に落ちんとして未だ全く落ちず、富士の中腹に群る雲は黄金色に染まつて、見るが中に様々の形に變ずる。連山の頂は、白銀の鎖のやうな雪が次第に

日が落ちる。野は風が強く吹く。林は鳴る。武藏野は暮れんとする。寒さが身に沁む。その時は路を急ぎ給へ。

風が今にも梢から月を吹き落しさうである。

山は暮れ
蕪村の句。

佐佐木信綱
歌人、國文學者
文學博士

遠く北に走つて、終りは暗澹たる雲のうちに没してしまふ。日が落ちる。野は風が強く吹く。林は鳴る。武藏野は暮れんとする。寒さが身に沁む。その時は路を急ぎ給へ。顧みて思はず新月が枯木の梢の横に寒い光を放つてゐるのを見る。風が今にも梢から月を吹き落しさうである。突然また野に出る。君はその時、山は暮れ野は黄昏の薄かなの名句を思ひだすだらう。
〔武藏野〕

四旅の歌

湯のやどりかどに吊せるから鮭の

竹柏園と號す
三重縣の人
明治五年生

ましらほによき
かぜみて、月の
夜をよすがらこ
ゆる洞庭のうみ
信綱

正岡子規

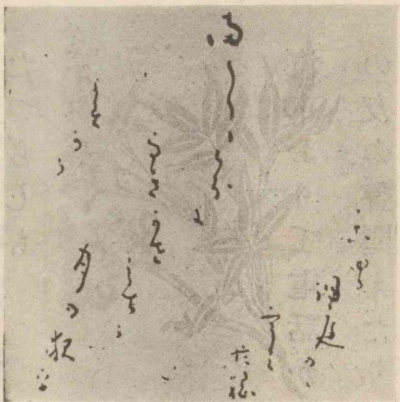
明治の俳人
名は常規
愛媛縣の人
明治三十五年
(三妻)歿、年三
十六

吉井 勇

歌人、文學者
東京の人
伯爵
明治十九年生

川田 順

歌人
東京の人
明治十五年生



佐佐木信綱筆蹟

隣に寒き山の冬の日

佐佐木信綱

鎌倉にわが来て見れば宮も寺も
賤の藁やも梅咲きにけり

正岡子規

われは練る昨日は都大路また今日は柑子の

かんばしき道
吉井 勇

庭の上に陽炎の燃え微かにて人居らぬかも

夢殿の晝
川田 順

窪田空穂
歌人、國文學者
早稻田大學教授
名は通治
長野の人
明治十一年生

與謝野晶子
女流歌人
寛氏夫人
大阪府堺の人
明治十一年生

土岐善麿
歌人
東京朝日新聞記者
號は哀果
東京の人
明治十八年生

柳のかげつれづれげにも人を見て蹲りゐる
宮の鹿ども
窪田空穂

ほととぎす東雲どきの亂聲に湖水は白き波
たつらしも
與謝野晶子

汽車おりて電話かくればここにしてみかしの友の聲聞えたり(奉天)
土岐善麿



與謝野晶子筆蹟

與謝野寛
詩人、歌人
號は鐵幹
京都の人
明治六年生

金子薫園
歌人
名は雄太郎
東京の人
明治九年生

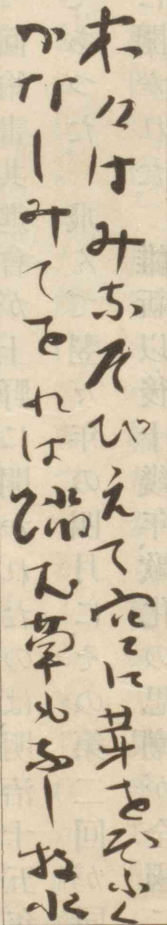
木々はみな露えて空に芽をぞふくかなしみてをれば踏む草もなし
牧水

若山牧水
歌人
名は繁
宮崎縣の人
昭和三年(二五八)歿、年四十四

わが船のけぶりの末に星見えて夕汐たかし

天草の灘
與謝野寛

かへり来て二日三日はまつはれる旅の心のなつかしきかな
金子薫園



若山牧水筆蹟

幾山河越えさりゆかばさびしさの終てなむ
國ぞけふも旅ゆく
若山牧水

狩野芳崖

明治の大畫家。
長府の人。明治二十一年(五三)歿、年六十一。

フェノロサ

Ernest Fenolosa,

(1853—1896)

アメリカのマサチューセッツ州の人、明治十一年(五三)來朝。

陋巷に埋れてゐた。

五 狩野芳崖とフェノロサ

我が國に於ける近代的美術展覽會の嚆矢ともいふべき第一回繪畫共進會が上野に開かれたのは、明治十五年の九月であつた。飛んで翌々年の四月に、その第二回が同じ上野に開かれた。維新以後十幾年、歐化の思潮が全國に瀰漫して、學者、政治家、教育家、誰一人由緒深い我が國固有の藝術を顧みる者がなかつたのに、今や國粹保存の機運が漸く芽ぐみ始めて、とにかく政府主催の下に、國本位の繪畫展覽會が開かれる運びとなつたのである。久しく陋巷に埋れてゐた畫家達が、奮ひ起つて出品を競つたのも無理はない。

心血を注いだ作品。

一尺
約三十センチ。

賞讃ではなくして罵倒であつた、喝采ではなくして冷笑であつた。

狩野芳崖もこの機運に乗じて奮起した一人であつた。けれども、彼が心血を注いだ作品も、當時の社會からは殆ど顧みられなかつた。第一回目は、たゞ陳列されたといふだけであつた。第二回目は三等賞を貰つたが、それは入賞中の最下位のものに過ぎなかつた。後者は「花下奔馬の圖」と題して縦四尺横二尺程の、小幅ながら極めて見事な出來て、作者も私かに許した傑作であつたが、しかもそれが社會から得た處のものは、賞讃ではなくして罵倒であつた、喝采ではなくして冷笑であつた。さすがの芳崖も、内心がつかりしてゐると、或日不思議な客が彼の陋屋を音づれた。客は碧眼紅毛の西洋人であつ

た。取次に出た彼の妻は、少しく狼狽した氣味で、あたふたと芳崖の居間へ來た。

「妙な人が訪ねてまゐりましたよ。あなた、西洋人が……」

「西洋人？」芳崖も怪しんだ。

「一人でか？」

「いえ、通辯が隨いて來まして、先

生の今度展覽會へお出しになつ

た御作を拜見して、大變感心しま

したので、急にお目懸りたくなつて伺ひましたと、かう

申します。」

芳崖の眉はピリ、と動いた。



眉がピリ、と動いた。

「西洋人の癖に生意氣な口を利きを。不在と言つて追つ拂つてしまへ。」

「でも、居りますと言つてしまひました。」

「ぢや、仕方ない。氣分が悪くて臥

せつて居るとでも言つておけ。

會ふのは厭だ。」

夫の氣象を知つてゐる妻は、争つ

ても無駄だと思つたので、玄關へ出



狩野友信

て、その通りに斷つた。

西洋人は、その日はそのまゝ引取つたが、二三日すると、また訪れた。そして今度は芳崖の入魂なる狩野友信の紹介

争つても無駄。

狩野友信
畫家、濱町狩野
家の裔。大正元
年(一九一〇)歿、年
七十。

卓絶した鑑識を有つてゐる。

日本畫の眞趣が味解されるわけがない。

狀を持つて來た。それによると、この人はエルネスト・フェノロサといふアメリカ人で、東京大學にお雇教師として數年來教鞭を執つてゐる學者である、そして東洋美術に對して卓絶した鑑識を有つてゐるといふことである。これを讀んだ芳崖は、さすがに前のやうに面會を謝絶する譯には行かなかつた。けれどもいかに友信の證明があるにせよ、こんな西洋人に日本畫の眞趣が味解されるわけがないと思つたので、洒落な芳崖は、一つ試験をして見ようといふ氣になつて、彼を伴なつて舊藩主なる毛利公の邸へ出かけた。

毛利邸へ行つて、芳崖は公爵家所藏の懸物や繪卷物をあ

曾我蛇足
足利期應仁頃の
畫家、李秀文の
子、名は宗譽、通
稱は式部、道號
は宗丈、文明十
五年(二四三)歿。

とからあとからと出しては示した。けれどもこのアメリカ人は、たゞ「ハア〜」と言つて見てゐるばかりで、容易に感歎の詞を洩らさなかつたが、最後に女中部屋から曾我蛇足の屏風繪を取出して見せると、彼は始めて會心の笑みを浮かべた、そして言つた。

「これはいゝ、これは實にすばらしい傑作です。」

これを聞いて、芳崖は驚歎した。實をいふと、それまではわざとさまでにもない物ばかりを仰山にして見せたので、價値ある作物は、やはりこの蛇足一つだけであつたのである。そしてその傑作をば、わざとむさくろしい女中部屋から引出して來て見せたのであつた。

胸襟を開いて語り合ふ。

こゝに於て芳崖は始めて胸襟を開いてフェノロサと語り合ふ氣になつた。そして話せば話す程、この米國の學者の並々ならぬ鑑識と蘊蓄とに感心した。そして西洋人の中にもかういふ人があるかと思ふと、自分の今までの考違を恥ぢずにはゐられなくなつた。

フェノロサは言つた。

「私は國に居つた頃から、日本の美術に對して深い憧憬の情を有つて居りました。けれども腹藏なく申すと、實際日本の土地を踏むに及んで、すっかり失望したのです。過去の日本美術は偉大です。しかし現在のそれは沈衰の極に陥つて居ります。それは今度の共進會を見ても

深い憧憬の情を有つて居りました。

沈衰の極に陥つて居ります。

獨創といふものがない。

よく分ります。あの會には、御國の一流の畫家の作が幾百と陳列されて居るのに、それが悉く死んでゐます。みんな古人の眞似事をやつてゐるばかりで、獨創といふものが少しもありません。大きな期待を懷いて會場へ行つただけに、私は實にがっかりしました。さうして、もう諦めて歸らうと思つた時に、あなたのお作がふと目に留つたのです。私ははつとして四邊^{あたり}が急に明るくなつたやうに感じました。どうだらう、この恐しい力は！ 熱は！ 私の求めてゐたものはこれだ！ これであつたのだ！ 私は思はず口へ出して、さう言ひました。こんな優れた作家があるのに、どうして日本の社會が認めな

どうだらう、この恐しい力は！ 熱は！ 私の求めてゐたものはこれだ！ これであつたのだ！

餘りにも無理解
な一般世間の仕
向に對しては、
さすが不屈の芳
崖も、ともすれ
ば絶望的の氣持

いのであらう、何とも言はないのであらう。とにかく私
はその人に會はなければならぬ。會つてその人の意
見をも聞き、私の思つてゐるところをも述べなければな
らない。さう思つて、この間もお訪ねしたやうなわけな
のです。あの時はお目にかゝれませんでした。今日は
かうして十分お話を伺ふことが出來て、こんな嬉しいこ
とはありません。」
けれども嬉しかつたのは、たゞフェノロサ一人ではない。
芳崖は更にそれよりも嬉しかつた。餘りにも無理解な一
般世間の仕向に對しては、さすが不屈の芳崖も、ともすれば
絶望的の氣持にならうとしたが、もう今日からは悲しむに

にならうとし
た。

確固不動の自覺
を得た。

理論上の根據を
擱んだ。

も歎くにも及ばなくなつた。彼には今や眞に己を知つて
くれる友が出來たのである。その日を始として、芳崖とフェノロサとの交情は日増し
に深くなつた。フェノロサの激勵によつて、彼は確固不動の自覺を得た。フェノロサの與へた美術上の



(筆崖芳野狩) 王明動不

新知識によつて、彼は自分の創作に對する理論上の根據を
擱んだ。「日本の社會が理解してくれなければ、世界を相手
にして描くまでのことだ。」彼はさうまで考へるやうにな

Boston.
米國東海岸北部の都會、學藝の中心地で、「アメリカのアゼンク」(Athens of America)と呼ばれる。

つた。
今、上野の東京美術學校第一の校寶とされてゐる「慈母觀音」ボストン博物館に陳列されて日本美術のために氣を吐きつゝある「鍾馗捉鬼の圖」その他、彼の名を不朽にした幾枚かの大製作は、それから僅か四年、たゞ四年しか生きることの出来なかつた彼の最晩年の極めて短い期間に描かれたものである。

(『明治美談』に據る。)

六夜又王

岡本綺堂

岡本綺堂
小説家、戯曲家
名は敬二
東京の人
明治五年生

登場人物
面教師 夜又王
源左金吾 賴家
夜又王の娘 桂

賴家

源賴朝の長子、
二代將軍。元久
元年(六四)七月
十八日弑せられ
た。年二十三。

修禪寺

眞言宗。空海大
師の開基とい
ふ。賴家、範賴の
幽閉された寺。



岡本綺堂

同 楓
下田五郎 景安
修禪寺の僧
元久元年七月十八日
伊豆の國狩野の庄、修善寺村、桂川の畔、夜又王の住家。

藁葺の古びたる二重家體。破れたる壁に舞樂の面などを懸け、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて、素焼の土瓶など掛けたり。庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の大樹、そのうしろは畠を隔てて、塔の峰つゞ

きの山または丘など見ゆ。
二重の上手に續ける一間の家體は細工場にて、三方に古りたる蒲簾をおろせり。庭さきには秋の草花咲きたり。
娘楓門に立ちて人を見送る體。そこに修禪寺の僧一人、燈籠を持

ちて先に立ち、つゞいて源の頼家卿二十三歳、後より下田五郎景安、十七八歳、頼家の太刀を捧げて出づ。

僧 これく、將軍家のお微行ぢや。粗相があつてはなりませぬぞ。

楓はツと平伏す。頼家主従進み入る。夜又王出で迎へて、

何の設けもござりませぬ。

夜又 思ひも寄らぬお成とて、何の設けもござりませぬが、まづあれへお通り下さりませ。

頼家は縁に腰打掛く。

夜又 して、御用の趣は。

頼家 問はずとも大方は察して居らう。我が面體を後の形見に残さんと、さきに其方を召し出だし、頼家に似せた

懈怠。

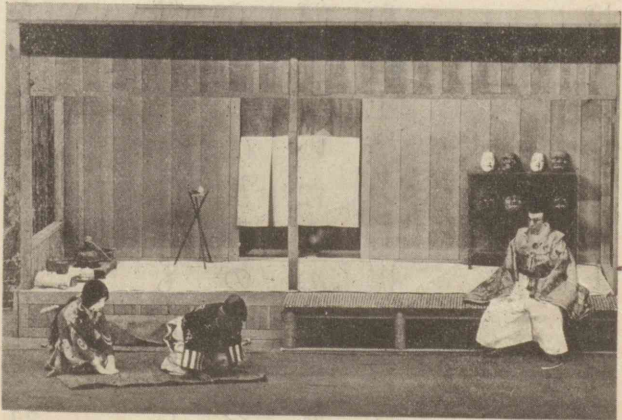
る面おもてを作れと、繪姿までも遣はして置いたるに、日を経れども出来せず。幾度か延引を申し立てて、今まで打過ぎしは何たることぢや。

五郎 多寡が面一箇ひとつの細工、いかに丹精を凝らすとも百日とは費すまい。お細工仰せ付けられしは當春の初、その後已に半年をも過ぎたるに、未だ献上いたさぬとは餘りの懈怠。最早猶豫は相成らぬと、上様の御機嫌散々ぢやぞ。

頼家 予は生まれついでにの性急ぢや。いつまでも待てど暮せど埒明かず、餘りに齒痒う覺ゆるまゝ、この上は使など遣はすこと無用と、予が直々ちかちかに催促に参つた。おの

職の名譽、身の面目。

夜又 御立腹恐れ入りましてござり
 まする。物體なくも征夷大將
 軍、源氏の棟梁のお姿を刻めと
 あるは、職の名譽、身の面目、いか
 で等閑に存じませうや。御用
 承りて已に半年、未熟ながらも
 腕限り根かぎりに、夜晝となく
 打ちましても、意に適ふ程のも
 の一箇も無く、更に打替へ作り
 替へて、心ならずも延引に延引を重ねましたる次第、何



これは生無き粗
 木を削り、男女、
 天人、夜叉、羅
 刹、ありとあら
 ゆる善惡邪正の
 魂魄を打込む面
 作師。

とぞお察し下さりませ。
 頼家 え、催促の都度に同じことを……。その申譯は聞き
 飽いたぞ。
 五郎 この上は唯延引とのみでは相濟むまい。いつの頃ま
 てには必ず出來するか、豫め期日を定めてお詫を申せ。
 夜又 その期日は申し上げられませぬ。左に鑿を持ち、右に
 槌を持てば、面は容易く成るものと思し召すか。家を
 作り塔を組む番匠などとは事變りて、これは生無き
 粗木を削り、男女、天人、夜叉、羅刹、ありとあらゆる善惡邪
 正の魂魄を打込む面作師。五體に漲る精力が、兩の腕
 に自ら湊まる時、我が魂魄は流るゝ如く彼に通ひて、始

職人冥利

めて面も作られます。但し、その時は半月の後か、一月の後か、或は一年二年の後か、我ながら確とはわかりません。

僧

これ、夜叉王殿。上様は御自身も仰せらるゝ如く、至つて御性急でおはしますぞ。三島神社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくらりと取留の無いことばかり申し上げてゐたら、御癩癖が愈、募らう程に、こなたも職人冥利、何日の頃までと日を限つて、確とお返事を申す、よからうぞ。

夜叉

ぢやというて、出来ぬものはなう。

僧

なんの、こなたの腕で出来ぬことがあらう。

面作師も

京鎌倉までも聞
えた者。

多くある中で、伊豆の夜叉王といへば、京鎌倉までも聞えた者ぢやに……。

夜叉

さあ、それ故に出来ぬといふのぢや。わしも伊豆の夜

叉王といへば、人にも少しは知られたもの。たとひお

咎め受けうとも、己が心に染まぬ細工を世に残すのは

いかにも無念ぢや。

頼家

何、無念ぢやと……。さらばいかなる崇りを受けうと

も、早急には出来ぬといふか。

夜叉

恐れながら、早急には……。

頼家

むゝ、おのれ覺悟せい。

癩癖募りし頼家は、五郎の捧げたる太刀を引つ取つて、あはや抜か

前後不揃の事を
申し立てて、予
を欺かうでな。

桂 まあ、お待ち下さりませ。

頼家 え、退け、退け。

桂 まづお鎮まり下さりませ。面は唯今献上いたします
る。なう父様。

と願みれども、夜叉王は黙して答へず。

五郎 何、面は既に出来して居るか。

頼家 え、己れ、前後不揃の事を申し立てて、予を欺かうでな。

桂 いえ、嘘偽りではござりませぬ。面は確かに出来
して居ります。これ父様。もうこの上は是非がご
ざんすまい。

楓 ほんに然うぢや。昨夜漸く出来したといふ彼の面を、

寧ろそ献上なされては……。

僧 それが可い、それが可い。こなたも凡夫ぢや。名も惜

しからうが、命も惜しからう。出来した面があるなら

ば、早う上様に差上げて、お慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。

夜叉 命が惜しいか、名が惜しいか、こなた衆の知つた事でな

い。黙つておるやれ。

僧 さりとて、これが見てゐられうか。さあ、娘御、その面を

持つて来て、ともかくも御覽に入れたが可いぞ。早う、

早う。

楓 あい、あい。

お慈悲を願ふが
上分別。

心少しく解けた
る體。

偽りならぬ證
據。

楓細工場へ走りて、木彫の假面めんを入れたる箱を持ち出づ。桂受取りて頼家の前に捧ぐ。頼家無言に桂の顔をうちまもり、心少しく解けたる體なり。

桂

偽りならぬ證據、これ御覽下さりませ。

頼家假面めんを取りて打眺め、思はず感歎の聲を擧げる。

頼家 おゝ、見事ぢや。好う打つたぞ。

五郎 上様御顔に生寫しぢや。

頼家 むゝ。(と飽かず打ちまもる。僧はしたり顔に)

僧 さればこそ言はぬことか。それ程の物が出来してゐながら、とかう濫つて居られたは、夜叉王殿も氣の知れぬ男ぢや。はゝゝゝ。

おめがね違ひ。

夜叉(形を改めて) 何分にも我が心に適はぬ細工。人には見せじと存じましたが、斯う相成つては致方もござりませぬ。方々にはその面かほを何と御覽なされます。

頼家 流石さすがは夜叉王、天晴れのものぢや。頼家も満足したぞ。

夜叉 天晴れとの御賞美は憚ながらおめがね違ひ。それは

夜叉王が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んで居ります。

五郎 面が死んで居るとは……

夜叉 年來としごゑ數多あまた打つたる面は、生けるが如しと人もいひ、我も許して居りましたが、不思議や、この度の面に限つて、幾度打直しても生きたる色無く、魂魄たましひも無き死人の相……

怨靈怪異。

重疊。

…それは世にある人の面ではござりませぬ。死人の面でござりまする。

五郎 そちはさやうに申しても、我等の眼には矢張り生きたる人の面……。死人の相とは相見えぬがなう。

夜又 いや、どう見直しても生ある人ではござりませぬ。しかも眼には恨を宿し、何者をか呪ふが如き、怨靈怪異なんどの類……。

僧 あ、これ、そのやうな不吉な事は申さぬものぢや。御意に適へば、それで重疊。有難く御禮を申されい。

頼家 む、とにもかくにもこの面は頼家の意に適うた。持ち歸るぞ。

夜又 たつて御所望とござりますれば……。

頼家 おゝ所望ぢや。それ。

頼家 願にて示せば、桂心得て假面を箱に納む。やがて頼家立ち、五郎も立つ。桂箱をさゝげて庭におり立つ。

僧 やれ、これで愚僧もまづ安堵いたした。夜又王殿、明日また逢ひませうぞ。

頼家 行きかゝりて物に躓く。

頼家 おゝ、いつの間にか暗うなつた。

僧 進み出でて桂に燈籠を渡す。桂假面の箱を僧に渡し、燈籠を持つて案内す。夜又王はじつと思案の體なり。

楓 父様お見送を……。

夜又王 始めて心づきたる如く、楓と共に門口に送り出づ。

五郎 そちへの御褒美は、改めて沙汰するぞ。

頼家等相前後して出で行く。夜叉王起ち上つて、默然としてゐたりしが、やがてつかくと縁に上り、細工場より槌を持ち來りて、壁に懸けたる種々の假面を取下し、あはや打碎かんとす。楓驚き取継りて、

楓 あゝこれ、何となさる。お前は

物に狂はれたか。

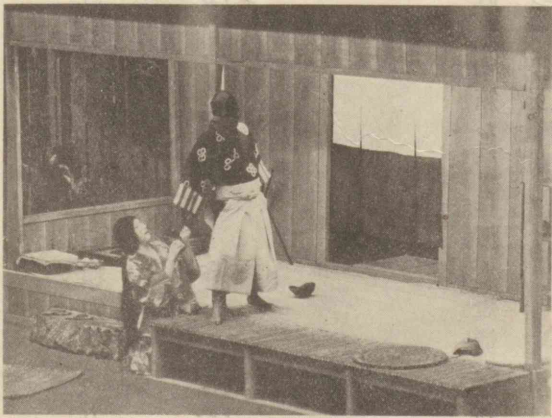
是非に及ばず。

夜叉 切羽詰りて是非に及ばず、拙き

細工を献上したは、悔んでも返

らぬ我が不運。あのやうな面

が將軍家の御手に渡りて、これぞ伊豆の住人夜叉王が



一生の名折、末代の恥辱。

作と寶物帳にも記されて、百千年の後までも笑ひを貽さば、一生の名折、末代の恥辱。所詮夜叉王の名は廢つた。職人も今日限り、再び槌は持つまいぞ。

楓 さりとは短氣でござりませう。如何なる名人、上手でも、細工の出来不出来は時の運。一生の中に一度でも

天晴れ名作が出来ようならば、それが名人ではござりませぬか。

夜叉 む。

楓 拙い細工を世に出したを、さほどに無念と思し召さば、

これからいよく精出して、世をも人をも駭かす程の

立派な面を作り出し、恥を雪いで下さりませ。

六夜叉王

と縋りて泣く。夜又王答へず、思案の眼を瞑ぢてゐる。日暮れて
笛の聲遠く聞ゆ。
〔修禪寺物語〕

七 手紙觀いろく

著述は演説のやうなものである。手紙は對話のやうなものである。親展極祕の手紙は親友間の祕密話のやうなものである。

人は心である。心を詞にあらはし、紙に寫して、或人に宛てたものが手紙である。手紙はアドレスである、←である、特別なる人の心と心とを繋ぐ橋掛りである。

Address.

←
〔かりに「矢」と讀みたい。〕

云爲行藏。

手紙は人の生活そのものの寫しで、人生の最も眞面目なる一部分である。

はるかなる云々
西行の歌。

沈黙は金である。

人の云爲行藏は、これを封じて宛名を書けば、悉く手紙となるべきものである。手紙は人の生活そのものの寫して、人生の最も眞面目なる一部分である。

「はるかなる岩のはざまにひとりゐて人目おもはで物おもはばや」沈黙は金である。世に無言、自足、自照、凝念の意味深きに比ぶべきものがない。この一念を特に或一人に示したものが手紙である。衆人の前に公開したものが著述である、演説である。

人の心は、これを示す相手が多くなり、場所が廣くなるに
随つて、その香氣がますます稀薄になり、その風姿がますます
餘所行きになつて来る。

感情が高まれば、詞の調子が低くなる。手紙の文は、かみし祿を
着るほど命がなくなり、文字選みをするほど力がなくなる。

人直接ぢかに話せば面白いが、手紙を見ては一向面白くない人
がある。これは、その人の心が突發的、火花の、斷片的、兎糞的
に發露するに適した人である。直接に話しては一向面白
くないが、手紙を見るとたまらなくゆかしい人がある。こ

突發的、火花の、
斷片的、兎糞的
に發露するに適
した人。



(筆ダンキ・ズンイへ)

りよた

たより

村の娘ケチーは、家人の留守を、たゞ一人で手紙を書いてゐる。他郷へ嫁いだ姉の許へか？ 都に出て働いてゐる兄へか？ いづれにしても、それは彼女の心のありのまゝが籠められるのであらう。一家の近況のありのまゝが傳へられるのであらう。

筆者ヘインズ・キング(1831—1904)は、英國美術協會の會員で、小品を得意とし、特にオランダ特有の田園生活を描いた風俗畫を得意として独自の畫風をなしてゐた。

この繪には、何の飾付もない部屋、ところ／＼破損してゐる床、手ざはりの荒さうなテール掛、厚ぼつたい着物とエプロンなどによつて、平和な農家の屋内を表現し、ケチーの顔と手と態度とによつて、村の娘の健康と素樸な無邪氣な可憐とを描き出してゐる。キングが傑作の一として評判の高かつたものである。

このケチーがもし日本の女學生であつたならば、「手紙觀いろ／＼」をば心を傾けて讀むことであらう。手紙好きな自分の事を思ひ合はせて、會心の微笑を漏らすことであらう。

冥想し、整理して組織的に表現するゝに適した人。

金鐵の交。

それは、その人の心が、冥想し、整理して組織的に表現するゝに適した人である。

直接に話して面白く、手紙を見て更にゆかしくなる人の交は金鐵である。が、これは百に一つもない。手紙や著述で慕つた夢の、直話に醒める、これが世の中である。

或老醫は、人から手紙を貰ふ毎に、それをば一々差出した當人の來訪と見做して、すぐに讀んで返書を認めた。もしまづ郵便が來て、つゞいて來客があれば、郵便の方を先客と見なし、お客を待たせておいて、まづ手紙の方から見て、それ

或老醫
石黒忠憲(子爵)
樞密顧問官、退
役陸軍々醫總
監の事と聞く。

に對する禮を盡くしたといふことである。有難い心掛である。

創作には雕心鏤骨の苦勞を惜しまず、手紙は當座のぎのごまかして間に合はせる。

詩歌小説などの創作をする事と、手紙を書く事との間に、何等輕重の差別をおくべき筈のものではない。相手を重んじ、想を重んずる限り、手紙に對しても、文學的創作同様に表現の苦心を要する筈で、創作には雕心鏤骨の苦勞を惜しまず、手紙は當座しのぎのごまかして間に合はせるといふのは、相手を輕んじ、自分の誠意を輕んずるものである。

「おとづれ」たより「手紙」「玉章」「水莖」。書翰といふことをあ

藤井紫影

國文學者
文學博士
京都帝國大學名譽教授
名は乙男
兵庫の人
明治元年生

萬葉集

二十卷。我が國最古の歌集。作者は第十六代仁德天皇から第四十七代淳仁天皇に至る四百四十六年間(一七二—一七九)に互り、歌の數は、長歌、短歌、旋頭歌等總計四千四百九十六首ある。

意字と音字

どこまで行つて

らはす世界の諸國の言葉の中で、我が國のが取りわけ優しく、意味深く、情情なまひしいのがうれしい。

(「水莖」)

八 俗字と當字

藤井紫影

一體當字とは何であるか。嚴格にいへば當字と正字との區別は甚だ立ちにくい。『萬葉集』の例でいへば、天地、日月をアメツチ、ヒツキとよむが正字で、垣津旗をカキツバタ、管士をツ、ジとよむ類は當字であらうが、泪をナミダ、丸雪をアラレといふのは、當字とも見られ、さうでないとも考へられる。この種の區別が甚だむつかしい。意字(漢字)と音字(假名)とを併用する日本文は、どこまで行つてもこの災厄を

もこの災厄を脱する事が出来な

脱する事が出来ないのである。いかに文字に潔癖な文士でも、當字なしには二行と小説も手紙も書けまい。多年の習慣で當字を正字と心得て使用してゐる人も多い。兎角、



影 紫 井 藤

馬鹿、泥棒、面倒、武骨などは最も廣く行はれてゐるもので、こんな當字はいけないといつたら、誰しも忽ち困るであらう。さりとして、どうせ漢字は色取りにまぜるだけの事だ、萬葉流だと思へばよからうなどと高を括つて、無暗矢鱈に出鱈目な文字を滅茶苦茶に使はれても困る。この兼合ひが至極難儀である。

萬葉流、無暗矢鱈、出鱈目、滅茶苦茶

節用集

いろは引の通俗漢字字書。室町時代に作られ、徳川時代を経て明治に至るまで弘く世に行はれた。

馬聲、蜂音、石花、蜘蛛、荒蚊

假名の發明が出来た後も、とかく漢字崇拜の風がつきまとひ、凡ての俗語に漢字を當てねば満足しないで、通俗字書たる『節用集』の類に、變挺な漢字をあてて、それが今日にまで及んだ。畢竟語源の明らかでない詞に、よい加減な素人考で漢字をあてるから起つたので、萬葉の馬聲(イ)蜂音(ブ)石花(セ)蜘蛛(クモ)荒蚊(アルカ)と洒落書きした當人が、おれの智慧を見ろとひそかに誇つたであらう如く、フザケを巫山戯、ガタピシを我他彼至と當て初めた人も、多分得意であつたらうと想はれる。こんな悪洒落はよして、すべて假名がきにしたら好からうといふ人もあるが、それも場合によつて一概にさうもなりかねる。餘り假名が長く續くとか、強く讀

讀者の目に印象
づけようとする
矢張。

耳にもかけな
い。

Folk etymology.
俗間語原學。

者の目に印象づけようとする時は、どうも漢字でなくては
具合がわるい。當字と知つてゐながら矢張使はねば濟ま
ぬ。馬鹿は梵語から出た語でも、莫迦と書くより馬鹿の方
がウツリがよい。ブコツはコチナシ(無骨)から出たにせよ、
それでは海鼠のやうで武骨らしく見えない。語原學者が
いかに怒號しても、一般民衆は耳にもかけないであらう。
俗間にはフォルクス・エチモロヂーがあつて、メンクラフ
は目昏ムめくらむの轉訛だといふよりも、擊劍でなぐりつけられて
面喰つたのだと説く方が、却つて人氣があつて信用されや
すい。メンドウは目遠めとほいで、見るを厭ふ意より起つた詞で、
現に醜い事をメンドイといふ地方もある。しかしこれは

耳遠い感。

神經を尖らせぬ
がよい。

日、陽。

不斷。

一般民衆には耳遠い感を起さず事であらう。いづれにせよ、普通使用する漢字の使ひ方といふものは、
餘り正確なものではないのだから、餘り神經を尖らせぬが
よい。さうかと思ふと、また一方では、近頃日の字に陽を使
ふ事が文士連の間に流行して、わざ／＼振假名つきで短歌
などに盛んに用ゐられる。日の方が象形的でもあり、字畫
も少くて便利なのに、妙な事がはやるものだ。思ふに日は
一日二日といふに紛れ易いとの心配から來たのであらう
が、それなら陽も太陽と限つた事ではない、廣く陰陽の意味
にも使はれるではないか。また平常の意味なる不斷を普
段と書く小説家の多いのも合點のいかぬ事である。

昭和四年九月。

高濱虚子

俳人、小説家
名は清
愛媛縣松山の人
明治七年生

Trail.

二條のレールは
：：車の下から
際限もなく生ま
れて行く。

一目散。

新城子
滿洲國奉天省
奉天の北方。

America.
Russia.

九 展望車より滿洲を 高濱 虚子

二條のレールは私たちの乗つてゐる車の下から際限もなく生まれて行く。ちやうど測量師の圓筒から目を盛つた帯皮が生まれて来るやうに。さうしてその生まれて来る二條の帯皮は、すぐ遠方に飛んで、小さくなつて行く。レールは私たちの汽車を載せて一目散に北へくと運んでゐるのである。

新城子といふ停車場がある。そこには日本の守備兵が二三人出て監視してゐる。展望車にはアメリカ人が二人、支那人が一人、ロシヤ人が

boy.

渴を醫する。

心を寛ろげる。



高濱 虚子
受取つて直ちに口に持つて行
つた。茶を飲むといふことは、
私たちに取つては渴を醫する
ばかりでなく、心を寛ろげると

いふことにもなるのである。が、ロシヤ人はその茶碗を素直に受取りはしたが、そのまゝテーブルの上に置いた。アメリカ人は首を振つてそれを拒絶した。

耳環がちら／＼
揺れて、頬紅を
つけてゐる頬に
觸れる。

黄塵。

一人の支那婦人が現れた。顔ばかり大きくつて、丈は低かつた。美しい支那緞子の服を着てゐた。耳環を嵌めてゐた。その耳環がちら／＼揺れて、頬紅をつけてゐる頬に觸れた。

レールは遙かに／＼小さくなつて行く。そのさきは黄塵に隠れてしまふ。急行の停らぬ小さい驛を通つた。その驛も直ちに黄塵の中に消えてしまふ。

大范河といふ河を渡つた。滿洲の河は、土地の廣漠たる割合に大きいのが少い。尤も遼河、鴨綠江、松花江といふやうな大江はあるが、その他の川は平生は大概水が少く、たゞ砂があるばかりだ。この大范河といふのも、小さい水が流

CULTURE

貨物を満載して。

れてゐるに過ぎない。少しカーヴがつゞいた。方向が餘程變つたのかと思はれたが、さうでもなかつた。平原の中にも多少の丘陵が見える。

またレールが眞直ぐにつゞく。

一臺の列車が摺れ違つた。それは貨車であつた。曾て北行する貨車は空車が多いが、南行する貨車は貨物を満載して居ると聞いたことがある。この貨車も北滿の貨物をいつぱいに積んでゐた。

レールの修復をしてゐる人夫の一團がある。中に手拭で口を包んでゐるのは大方人夫頭の日本人であらう。支

鐵嶺
遼河の中流に位
し、水陸運輸の
便がある。

tank.



滿洲平原

那人は汗の肌を日に光らせて、大きな口を開けて、埃を吸うてゐる。大きな停車場が見える。それは鐵嶺である。ロシヤの遺物の大きなタンクが空に聳えてゐる。汽車は大きく緩く一二度反動をして停車した。洋館がある。多分驛員の宿舍であらう。その奥に、すし、どんぶりなどと染め抜いた暖簾のかゝつてゐる家並が見える。楊柳がそれらの家の軒ごとに青く枝垂

開原
奉天省の北部、
鐵嶺の北東にあ
る舊都。

れてゐる。この鐵嶺には守備隊の大部隊があるとのことである。また聯隊もあるとのことである。發車した。一人の巡查のいつまでも我が汽車を見送つてゐるのが目に留る。速力が緩んでまた停車場に着いた。開原だ。大連行の客車と摺れ違ふ。水田があつた。その傍に朝鮮人が白い着物を着て跣足になつてゐた。水田がある所には必ず朝鮮人を認める。支那人は跣足になる事を非常に嫌ふさうだ、随つて米を作る術を知らない。水田のある所には必ず朝鮮人がゐる。

四平街
奉天省にある、
交通の中心地。

赤い銅盤。
憂鬱な入日。

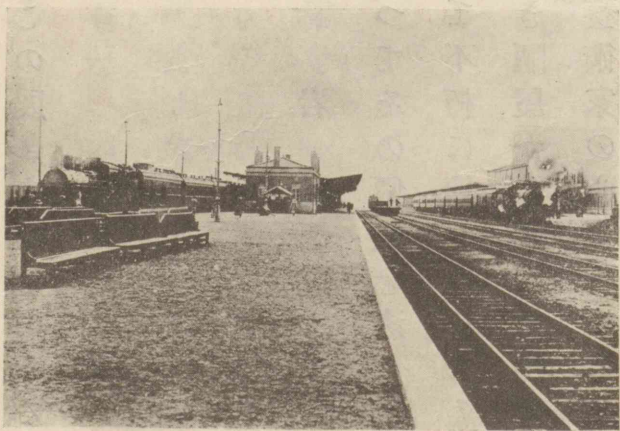
黄塵がすこし少くなつたやうだ。椅子に後頭を凭せて瞑目してゐると、ボーイがまた茶を
持つて來た。
四平街に着いた。こゝはかなり大きな街である。街の
家に電燈がぼつ／＼灯つた。赤い大きな入日が楊柳の上
にかゝつてゐた。
發車した。

黄塵の中に大きな入日が沈まうとしてゐる。その入日
は、黄塵のために光がなく、赤い銅盤のやうに見えた。
西の空に、殆ど墨色をした憂鬱な入日が沈んで行つた。
暮色が際涯なき野を蔽うて來た。野徑を歸つて行く人が

猶ほ二三人あつた。

私たちの展望車内には、明るい
電燈がぼつと灯つた。先刻から
私たち日本人のほか、支那の婦人
が向側に腰を掛けてゐた。この
支那婦人は少しもあたりの人に
臆するやうな色もなく、やがて長
椅子の上に横臥した。

窓外の景色はいよ／＼暮れて
來た。遠近にある楊柳はたゞ黒い帯のやうに見えた。
外面は全く暗くなつた。時に八時。日本の時計にする



新 京 停 車 場

遠近にある楊柳
はたゞ黒い帯の
やうに見えた。

長春

大同元年（昭和七年）三月滿洲國成立と同時に首都と定められ、新京と改稱。

岩橋武夫

關西學院教授

大阪の人

明治三十一年生

と九時。暮れるのが餘程遅い。眞黒な闇の中を、更に北へくと走つて行く汽車の尻の方に、螢の如く明るく灯つてゐるこの展望車の灯のあることを意識する。間もなく長春に着いた。

一〇 ミレーの晩鐘

岩橋武夫

凡そ偉大なる藝術は、黄金によつてその價值を決し得るものではない。人類の至寶として不朽に傳へられてゐる作品は、事實多くは都會のいぶせき陋屋から、或は片田舎のむさくろしい隅々から、名もなき藝術家の心が神に通ふ眞

眞摯な努力。

France.

Jean François

Millet.

(1814-75)

Paris.



岩橋武夫

摯な努力によつて産み出されたものである。かのフランスの畫家ミレーの作品の如きは、その最もよき實例の一つである。

ミレーは若い時分に、パリで裸體畫を描いてゐた。もしそのまゝの生涯を續けて行つたならば、彼は遂に後の偉大なるミレーではなかつたであらうが、有難いのは天である。

或日彼は妻と共にパリの街を歩いてゐた。そして或畫商の飾窓を覗き込まうとして、ふと傍なる二人の男の立話に耳をそばだてた。

一人の男が言った。

「おい、この繪は誰が描いたんだ？」

他の男が答へた。

「ミレーといふ奴が描いたのさ。」



「は、あ、この男も、流行の俗畫を描かんと食つて行けない連中の一人と見えるなあ。」
先の男はかう加へた。そして二人は顔を見合はして、くすくすと笑つた。無論當のミレーがそこにあると知る筈はないが、ミレー自身にとつては、これが實に大きな反省の鐵槌。

大きな反省の鐵槌。

槌であつた。

彼は全身の血が一時に凍つてしまふやうに感じて、思はず手を握りしめた。彼は直ぐに妻を促して公園へ飛び込んだ。そして溜息をついて言つた。

「今の話を聞いたか。自分は残念ながら、たゞの裸體畫家としか見られてゐない。しかしそれも無理がない。自分分はたゞパンのため、に賣れ足の早い繪を描いて來たのだからな。かうなると、お母さんの言つたことが、しみじみ想ひ出されて來る。お母さんが、いつか言つたよ。「お前は何をして、もよいが、たゞ神様の榮光を汚さないやうな仕事をして、おくれよ」つてね。自分は明日から裸體畫

全身の血が一時に凍つてしまふ。

賣れ足の早い繪を描いて來た。

苦しみの道連れにして、墓場まで引つばつて行くことが出来ない。

を描くことを止める。止めれば無論すぐに生活に窮するが、それは覺悟の前だ。但しお前を貧乏の道連れにするのは忍びない。お前はまだ若い、さうして美しい。このまゝ別れようではないか。自分には、自分の苦しみの道連れにして、お前を墓場まで引つばつて行くことが出来ないからね。」
「それは間違つてゐます！」ミレーの妻はきつぱりと言つた。「どんな暮しをしても夫婦は夫婦です。それに、さういふえらい決心をされたあなたを、私がどうして捨てられませう。私は永久にあなたの側にて、あなたの妻であることを誇りたいと思ひます。」

かくして、二人は固い誓を結んだ。ミレーの喜はいふまでもない。彼はやがて一つの提案をした。

「三日の中に自分はパリを去らうと思ふが、お前は若い身空で都を見捨てるのは辛からう。自分の行く所は田舎だ。自分を待つものは労働だ。そして自分は百姓になるのだ。自分と一緒に田舎に行く決心がお前にあるか。健氣な妻は直ちにこれにも同意した。かくして三日の後、ミレー夫妻は、明るい街歌の街、享樂の街から永遠に遠ざかつた。」

それからミレーは、一介の水呑百姓となつて働いた。繪筆を握つた彼の優しい手に、鋤が持たれ、鍬が握られた。彼

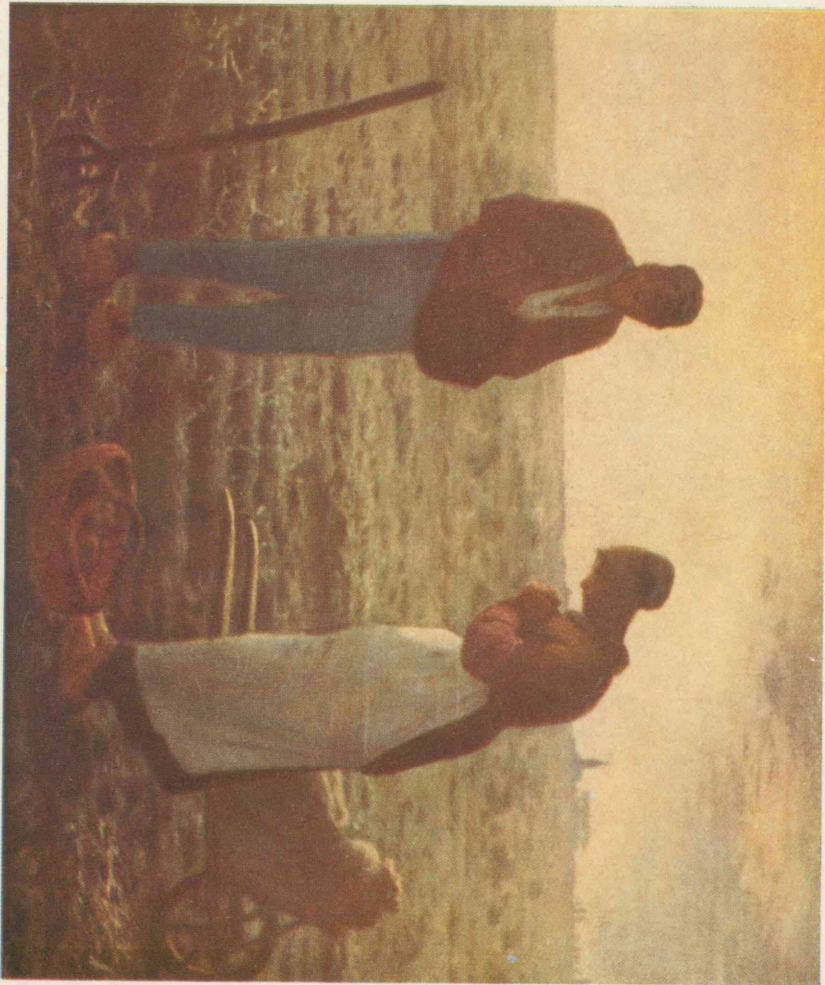
一介の水呑百姓。

の妻も同じく一介の水呑百姓の妻として働いた。そして二人は多くの子女に取巻かれて、好き父となり、好き母となつた。この生活の眞唯中から産聲を擧げたのが、あの有名な「晩鐘」である。

その頃ミレーの家は毎日の糧にも事缺くやうな有様であつた。ストーヴに入れる薪を買ふ金のないことすらも、時にはあつた。しかしミレーの魂は歡喜に燃えて躍つてゐた。彼が會心の作はこの間に生まれたのである。我々は、あの「晩鐘」の畫を三色版で餘りに多く見過ぎてゐるので、あの和やかな、宗教味の多い畫の描かれた背景に、このやうな血と汗の滲んだ生活のあつたことを知らない。

stove.

會心の作。



(ミレーの)

鐘 晩

シャノン・フランソワ・ミレー (1814-1875) が世評に鞭打たれ、驕然我が本領の藝術道に精進すべく決心して、妻と共に田舎に引込んだことは、岩橋教授の本文に於て美しく物語られてゐるが、その落ちついた先は、二三の先輩美術家のゐたバルビソンの森であつた。そこで彼は自ら半農半畫の生活を送り、また周囲の農民の生活を觀察して、「種蒔く人」「晩鐘」「夕べの祈」といふ三つに倚る農夫」「落穂拾ひ」などの名作を完成したが、あまり世評に上らず、却つて弱者に同情し過ぎる社會主義畫家であるとの非難を受けつたのであつた。その同じ繪が天下の視聽を集めたのは、一八六七年のパリ大博覽會に「晩鐘」「落穂拾ひ」外七點を出品した際に、たまたまバルビソンの森で親しくした友人のルソーが審査委員長であつてミレーに一等賞を授與してからで、それ以來彼は農民藝術の先驅者として漸次に名聲を博するやうになつた。「晩鐘」の如きは、後年五十三萬五千フランで米國の富豪に購ひ去られたのを、再び七十五萬フランでパリに買ひ戻したといふ逸話がある。

晩 鐘

H. Van Dyke.
(1852-1933)

アメリカの批評家、ヘンリー・ヴンダイクは「晩鐘」を評して、
「こゝに三つの偉大が象徴されてある。一つは労働、一つは愛、そしてもう一つは信仰である。」
と言つた。まさしくその通りである。あの畫の題材は、夫婦の百姓が夕の祈である。彼等は今しも車の傍に農具を休め、帽子を脱いで頭を垂れてゐる。彼等の立つ場所は野中の島で、見渡す限りが廣い田園である。こゝに労働がある。愛がある。そしてその愛は清い淨い夫婦の愛で



(筆-レミ) ひ 拾 穂 落

莊嚴
敬虔

ある。その上に更に信仰がある。彼等はたゞ地上を見て頭を垂れてゐるのではない。莊嚴な鐘の音に聴き入りながら、敬虔な頭を垂れてゐるのである。尙ほ注意して御覽なさい。今や西の空には僅かの餘光を残して、夕陽が沈まうとしてゐるではないか。そしてその餘光が森蔭に頭を擡げた教會の塔に美しく映えてゐるではないか。田園一帯が夕を告ぐるこの教會の鐘の音に包まれて、それを合圖に、清淨な心の男女が聖き勞働を終へた一日を感謝してゐるではないか。かやうに勞働と愛と信仰とを一つの畫面に渾然と表現したこの「晚鐘」こそ、まことに神と人との前に成された最も偉大なる藝術といふべきで、それが久しく世

聖き勞働

渾然

多端匆忙
清涼劑

下田歌子
教育家
實踐高等女學校
長
岐阜縣の人
安政三年生
雅び心
風韻
にほひ

に知られずして貧しい田舎家に埋れてゐたといふのは、いひ知らぬ哀れのこもつた話であると、私は思ふ。
ミレーが今一つの名畫に「落穂拾ひ」がある。これも農民生活のすばらしい表現であるが、前なる「晚鐘」と相伴なつて、多端匆忙なる現代人の生活を美化しつゝ、精神的清涼劑となつてくれるのは感謝すべきことである。

一一 風流閑雅の趣味

下田歌子

風流閑雅の趣味とは言ひ換へれば雅び心であります。風韻とか「にほひ」とかいふのも、この心の感ずる味はひでありませう。この嗜みのある人は、自然の景色や、植物、動物な

鑑賞

人にこの風流な趣味のあるのは、譬へば花に清き香りがあるやうで。

どに對しても、その持つ美しい味はひを見出だしては、靜かにそれを樂しみ、また文學や美術などに對しても、その中に含んでゐる高尚深遠な意味を鑑賞するところから、自然に物慾が少くなり、心の品位が高くなり、隨つて純潔な、落ちついた心を持つて世に處するやうになります。同時に、つまらぬ事にあくせくせず、富貴貧賤にも心を動かさず、落ちついて自分の務むべき事を務め、樂しむべき事を樂しむやうになるところから、自然に人から尊敬せられ、また親愛せられるやうになります。人にこの風流な趣味のあるのは、譬へば花に清き香りがあるやうで、誠に奥ゆかしいものがあります。が、人間の花といはれる婦人には、殊にこれが肝要

醜草

たうしあみ
心のかけ
うゆみ

村上天皇 第六十二代。御在位天慶九年(二六三)一康保四年(二六三)。
清涼殿 宮中に於ける天皇の常の御座所。
藏人 宮中に於て天皇に側近し、日常の御用を勤める役人。

で、この風流の心がけを缺いては、何の香りもない醜草同様のものになつてしまひませう。
昔の日本婦人は、多く心にゆとりがあり、何かにつけ修養を怠らなかつたので、この風流閑雅の趣味についても、いろいろ奥ゆかしい逸話を残して居ります。こゝにその二三を擧げてみませう。

村上天皇の御代に、清涼殿の御前の紅梅が枯れたので、似合つた代りの木を求められたことがありました。その御用を承つたのが某といふ藏人で、この御所の御庭を飾るべき名木を詮議して、方々を尋ね廻ります中に、西の京の或ささやかな家の庭で、美しい花をつけた一株の紅梅を見つけ

案内

ました。藏人は早速案内して掘り取らせて歸らうといた
しますと、内から一人の小女房が出て参りまして、これをそ
の枝に結びつけて給はれといつて、一枚の短冊を差出しま
した。見ると、由ありげな筆蹟で、

救なればいともかしこし鶯の

宿はと問はばいかが答へん

と書いてありました。

藏人は怪しみつゝ、御所に歸ると早速これを天覽に供し
ました。帝はつくづくと御覽になりましたが、やがて龍顔
を曇らせられ、憐れのものよと仰せられました。すぐさまそ
の梅の木を舊の庭に返させられました。その小女房は名

天覽
龍顔

紀貫之
平安朝初期の歌
人、古今集撰者
の隨一。天慶九
年歿。

一條天皇
第六十六代。御
在位寛和二年(一
〇七二)―寛弘八年
(一〇七六)
中宮定子
一條天皇の中宮
藤原定子。

香爐峯の雪
遺愛寺ノ鐘ハ枕
ヲ飲テテ聴キ、
香爐峯ノ雪ハ簾
ヲ撥ケテ看ル。
(白氏文集)

高い歌人の紀貫之が息女であることが、後で分りましたが、
この風流の逸話によつて、以後この梅を鶯宿梅と呼ぶやう
になつたと言ひ傳へられて居ります。

また一條天皇の中宮定子と申す御方、これは名高い清少
納言の御仕へ申した、才藝のすぐれた麗人でありましたが、
或雪の朝に、おそばの清少納言を呼んで、少納言よ、香爐峯の
雪は如何に。と仰せられますと、彼女はすぐに立つて御前の
御簾を捲いて、御前にかしこまつたといふことが、枕の草子
の中に書いてあります。これは、香爐峯の雪は簾を撥げて
見る。といふ白樂天の名句に思ひ寄せたので、普通人ならば
たゞ、寒いものが降つた、積つたと見るべきところを、古典を

梶原景季

景季の長子、宇治川先陣争の勇士。壽永三年(八四四)攝津國生田の森の戦に範頼の軍に従ひ、箆に梅花の枝を挿して出陣した。謡曲「箆」はこの故事に據つたのである。

味はひ、古賢を偲びつゝ、簾のかなたに天地一白の銀世界を眺めるといふのは、實に面白いことではありませんか。
下つて武家時代になつて、鎌倉の初に、梶原景季、箆に梅花をかざして戦場を馳驅した、あの高名の武人であります。その景季の妻が、或日他行の途中、見事に咲いた櫻を見過しかねて、侍女に折らせて居りますと、頼朝公が物見から遙かに見られて、
心なく手折りても行く櫻かな
また來ん春は何を頼まん
と詠みかけられました。女は名將軍が風流の御からかひに恐れ入りましたが、取敢へず、

出づる息の入るをも待たぬ世の中に。

出づる息の入るをも待たぬ世の中に

また來ん春の頼まればこそ

稱美。

と、御返歌をいたしました。頼朝公は、つくづく感ぜられて、「さてもやさしき婦人ではある。何人の妻ぞ。」と尋ねられましたが、箆の梅の景季が妻と知られて、夫は梅、妻は櫻といづれ劣らぬ風流な嗜みを深く稱美されました。
その後不幸にもこの二人の間に感情の行違が起りました。そして景季は意を決して妻を離別しようとなりました。が、頼朝公はこれを聞かれて、「それはいつぞや、櫻を手折つて、心きゝたる歌を詠んだ婦人ではないか。その風流な婦人を、一朝の行違によつて去るとは惜しいこと。見合はせる

がよい。」と御意見があつたので、遂にもと通りにをさまつて、
睦まじく添ひ遂げたと申します。

その他にも、加賀の千代女が夏の或朝早く隣家に水を乞ふとて、

朝顔につるべ取られて貫ひ水

と詠みましたのや、塙檢校保己一の妻が、或年の八月十五夜

に、

名月は座頭の妻の泣く夜かな

と詠じましたのなど、皆我が國の婦人特有の思ひやりと風流とがよく調和して現れたもので、日本婦人の心情の最も美しい一面を見せたものであります。

加賀の千代女
俳人。加賀松任
の人。夫の歿後
剃髪して素園尼
と稱した。安永
四年(一八一五)歿、
年七十四。
塙 保己一
徳川時代の盲目
の國學者。文政
四年(一八二一)歿、
年七十六。

隨喜。
天賦。

これらの事どもを考へ合はせますと、我が國の婦人には、
古來何ともいはれぬ上品な嗜みがあり、それが咄嗟の不用
意に美しく現れてゐるので、殊にその現れが一種の立派な
藝術の形を取つてゐるのを見ますと、私どもはそれら先代
の代表女性に隨喜すると同時に、厚く惠まれた我が女性國
民の天賦に感謝せずには居られません。

一二 簞 蟲

落 合 直 文

簞蟲にわれあらねども秋風になき父をのみこひわ
たるかな

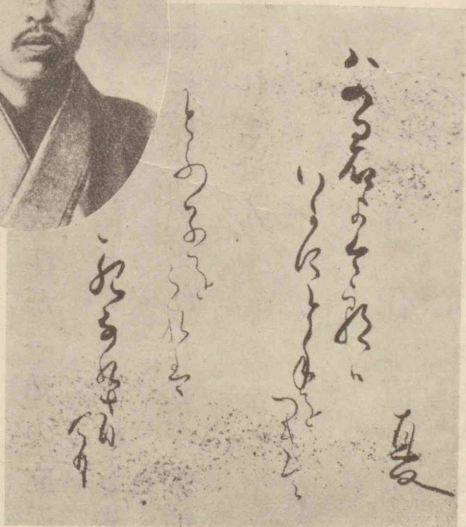
落合直文
國文學者
號は秋廼舍
仙臺の人
明治三十六年三
月三歿、年四十
三

母の背にむかしながめしわが身とは知るや知らず
やふるさとの月

直文
父君よ今朝はいかにと手をつき
てとふ子を見れば死なれざりけり

世に媚びぬころも見えてなかなかに瘦せたる菊のおもしろきかな

父と母といづれかよきと子に問へば父よといひて母を



落合直文の筆蹟

かへりみぬ

緋緘の鎧をつけて太刀佩きて見ばやとぞおもふ山

櫻花

霜やけの小さき手して蜜柑むくわが子しのぼゆ風の寒きに

片假名のかたなりながら文かきて子はおこせたり
年のはじめに(安房にて)

片假名のかたなりながら

二つなきものなりながら事しあれば千々に碎けて物をこそおもへ(心)

橘 南谿
醫者、旅行家

伊勢の人
宮川氏、名は春暉、字は惠風、梅仙とも號す
文化二年(西曆一八五五)年五十二
野服を着し、方頂巾を戴きし。

一三 備後疊

橘 南 谿

備後國を通りし時、百姓と見えし年老いし男二人、ふと道連れになり、山の名、里の風俗など尋ね問ひて行きたりしに、我が野服を着し、方頂巾を戴きしを怪しみて、「いかなる人にて、いづくよりいづくへ行き給ふにや。」と問ふに、「都方の醫者なるが、醫術修行のために諸國を遊歴するなり。」と答へしかば、「儲も頼もしき御人や。我等が住む里は向うの山の奥なるが、親しき家の女房に奇妙なる難病ありて、はや二年にな

露ばかりの驗もなく。

尾の道
廣島縣尾道市
備後第一の港
二三里
一里は約四キロ。

れるが、近きあたりに住み候へば、聞くもいぶせく、その家にもいろいろと醫療盡くさざる事もなければ、露ばかりの驗もなく、今ははや命さへ危く見え候ひぬ。かく山深き片田舎にて、名高き醫師も候はず、あはれ都近くもあるならば、など、親類の者は歎き居り候ひぬ。今日は計らずも京都の御醫と承り候へば、親類どもが常々の詞も思ひ出し候ひて、あはれにも候へば、何とぞ脈ばかりにても取らせ給ひて、彼等が心をも慰め給はらばや。」と、誠の心言葉に出でて、また餘儀もなく見えたりしかば、余もこの道修業のことなれば、「いと易き事なり。」とうけがひて、彼の者どものしりへに従ひて、尾の道の二三里ばかりこなたより右の方に分け入る。

程も知れぬいたづら事。

あすはまた此里だにもしのばれむけふはきのふのゆく末のたび
春暉

とある山あひのいと淋しき里。

しかぐの由。

鹿狼の通ふ如き細道を、谷に下り峯に上りて、行けども行けども程遠きに、腹饑ゑ足疲るれば、僕腹立て、程も知れぬいたづら事とつぶやく。とかうなだめて行く程に、やうく

旅

明日はまた此里だにもしのばれむけふはきのふのゆく末のたび
春暉

橋南 録筆

に到り着きぬ。とある山あひのいと淋しき里にて、本郷といふ所なり。

その家に入れば、病者は五十ばかりなる女にて、その夫を六兵衛といふ。案内の者しかぐの由をいへば、家内皆驚き悦び、去年の冬より、難治の病に罹りしが、次第に重りて、果

なか／＼いふも愚かなり。

は腹裂くる心地して、苦しみ譬へむかたなし。日々月々に病つものり、春の頃よりは一しほにて、横に臥せば下腹一しほ裂くるが如く、立てば苦しく、坐すれば堪へ難し。それゆゑ晝夜たゞ火燵のやぐらに両手をつかへ、立ちながらうつむきてゐることのみ、少し心やすらかなるやうなれば、春以來は片時も坐せず、臥せず、たゞ晝夜食事にも眠るにもこの通りなり。その苦しみなか／＼いふも愚かなり。近き頃は殊にあしければ、命の限りも遠からじと、一日も早く臨終をのみ待ち侍るなり。命のことは助かるべくも思ひ侍らねど、都の人と承ればゆかしくこそ候へ。何とぞ一日なりとも、この苦しみを助け給はりて、横に臥して安らかに臨終を

苦しみの聲隣を
動かし。

三原
廣島縣御調郡、
淺野氏の國番城
のあつた所。

得しめ給はば、上も無き御惠」と涙を流せるさま、げに見るさへあはれなり。晝夜立ちてうつぶし居れば、足は柱の如く、腫氣ありて、顔もまた眼ぶちはれ、額も浮きて、生きたる人の如くにもあらず。一しきり腹はり來たる時は、苦しみの聲隣を動かし、聞く者すら堪へかねたり。病體はまことにかくの如く危く甚だしけれど、その脈に見どころありければ、いそぎ藥を與へ、尙ほ藥湯を以て腰より漬し、種々の療術を用ゐしかば、やがて通利出で來て、始めて横さまになることを得たり。尙ほしなぐの療治を加へ、この以後に用ゐる藥方を委しく書き記し、用ゐる方などまでもくはしく傳へ置きて、その家を辭して、數里の深山をわけ出でて、三原の城下

に着きぬ。

三原にてこの物語をせしに、諸も危き事なりき。御心に誠ありぬればこそ佛神の助もありて、まことの事に逢ひ給ふならぬ。かくの如き事は、多くは盜賊のいつはる事にて、旅する人を人なき深山に連れ行き、さし殺して金銀衣類を奪ふこと珍らしからず。この後は必ず疎忽の振舞し給ふべからず」といひけるにぞ、始めて心づきて、恙なかりし事の嬉しかりき。

疎忽の振舞。

それより諸國をめぐり、二年を過ぎて京に歸りゐたりしに、或日六條の旅宿のあるじ訪ね來り、「一兩年以前九州へ赴き給ひし御醫者はこなたなりや」と問ふ。「いかなる用ぞ」と

手がかりもなき尋ねやう。

聞けば、備後國より六兵衛といふ百姓一人のぼり來り、下に市の字の附きたる御醫師を聞き及ばずや。何とぞ尋ねくれよ。去々年しかく、の事にて高恩にあひぬれば、御禮のために來りたり。その御名は聞かざりしかども、荷物の下げ札に市の字を見及びたりといふ。手がかりもなき尋ねやうかなと存じ候へども、その志の殊勝にも候へば、まづ試みに標札を見めぐりて、市の字を見當り候へば、おたづね申すなり。」といふにぞ、その事あり。」といへば、則ち歸り



蘭草 (備後表材) の栽培

不思議の御縁。

弘法大師

空海。眞言宗の開祖。一代の信望を聚めた高僧で、詩文書畫をも能くした。承和二年(二四九)寂、年六十三。

東寺

京都市下京區にある眞言宗東寺派本山。延暦十五年(一四六)建立。嵯峨天皇の時空海に賜ふ。本尊仁王護國は空海之作。

て、その次の日、かの六兵衛同道して來りつゝ、備後疊を自ら持ちて禮物とし、さても過ぎし年は不思議の御縁にて、妻なる者御療治に逢ひ、命は無きものと覺悟致し居り候ひしを、その日より驗しるしを得、仰せ置かれし日限の如くに、かゝる難病平癒して、再び常體つねていの人となれること、殊に近所の者の行き逢ひより始りて、御名さへ承らず候へば、弘法大師の來らせ給ふなりとのみ、一村の評判にこそ致し候へ。京を尋ねたりとて逢ひ奉るべしとは圖らず候へども、命助かりし御高恩、一言の御禮も申さざる心の中も安からず、もし逢ひ奉る事なくは、東寺にても參り候うて、弘法大師様へ御禮申し歸るべしと、存じ極めて參り候ひしなり。まづは尋ね當りて

邊土の民の篤實なること、感ずるにも猶ほ餘りあり。

二宮翁
經濟家。名は尊徳、通稱金次郎。小田原の人。安政三年（五十六）歿、年七十。櫻町の陣屋、栃木縣芳賀郡物部村にあつた。

日頃の本望にかなひ候なり。とて、眞實顔色に表れたり。予も嬉しくて、しばしもてなし慰めて歸しやりぬ。都近くの者ならましかば、百里に餘れる海山をいかではるく尋ね來るべき。邊土の民の篤實なること、感ずるにも猶ほ餘りあり。

（西遊記）

一四 悔いて食はず

二宮翁が櫻町の陣屋にありし頃、出入の疊職人に源吉といふ者ありき。口を能く利き、才ありといへども、遊惰なれば常に貧乏せり。年末に及んで、翁の許に來り、餅米の借用を乞ふ。翁曰く、汝の如くいつも家業を怠る者が正月なればとて、年中勉強したる者と同様に餅を食はんとするは心得違なり。正月は不意に來るものにあらず、米も偶然に得らるゝものにあらず。正月は三

正月は不意に來るものにあらず、米も偶然に得らるゝものにあらず。



二宮尊徳木像

百六十日あけくれして來り、米は春耕し、夏耘り、秋刈りて、始めて得らる。汝は春耕さず、夏耘らず、秋刈らず、米なきは當前のことなり。されば正月なりとも餅を食ふ道理あるべからず。今貸すともいかにして返さんや。借りて返す道なき時は、罪人となるべし。正月に餅が食ひたくば、今日より遊惰の習を改め、山林

一心爲_ス往來_ス是_レ名謂_フ思忘_ル
 一心爲_ス清濁_ス是_レ名謂_フ迷悟_ル
 一心爲_ス輕重_ス是_レ名謂_フ虛實_ル

に入りて落葉を搔き、肥を拵へ、來年、田を作り、米を得て、來々年の正月、餅を食ふべきなり。まづ來年の正月は己が過を悔いて餅を食ふことを止めよ。」と懇に説諭せられたり。源吉大きに先非を悔い、「遊惰にして家業を怠りながら、年中勉強する人と同様に、餅を食ひて春を迎へんと思へるは、

一心爲 _ス 往來 _ス 是 _レ 名謂 _フ 思忘 _ル	尊
一心爲 _ス 清濁 _ス 是 _レ 名謂 _フ 迷悟 _ル	德
一心爲 _ス 輕重 _ス 是 _レ 名謂 _フ 虛實 _ル	筆

全く心得違なりき。この度は餅を食はず、過を悔いて年を取り、年明けなば、二日より家業を始め、刻苦して、來來年の正月は、人並に餅を搗きて祝ひ申すべし。」と言ひ、厚くその教訓を謝して門を出づ。

しをくとして
出で行く。

生まれ替りたる
が如くなりて。

翁は源吉がしをくとして出で行くを見て、俄かに呼び戻して曰く、「余が教訓能く腹に入りたるか。」源吉曰く、「誠に恐れ入りたり。生涯忘れずして勉強すべし。」翁乃ち白米一俵、餅米一俵、金一兩に大根、芋等を添へて與へらる。これより源吉は生まれ替りたるが如くなりて生涯を終へたりといふ。

一五 橘 媛

速風が速風を追うて、船を波頭に打ちつけながら吹き荒れた。その度ごとに、船が木の葉のやうに揺れては、波頭から波の底へ、打下される。

命
日本武尊。

命の御船は已に荒れ狂ふ浪の真中に漂つてゐた。勇猛な益荒男達もこの自然の暴力の前に、顔を掩うて倒れてゐた。海に慣れた水夫すら茫然としてせん術を知らなかつた。命はじつと空の一角を睨んで立つてゐられたが、怖を知らぬ御眼差にも、いつしか曇の影が見えて來た。

橘媛をめぐる侍女達の顔には、もう生きた色がない。前から、後から、左右から、のみならず頭上からまで、齒をむいてのしかゝる白浪の脅威に、おびえては伏しまろび泣き叫ぶ。「取りみだすまいぞ。これしきのあらしに怖れて、見苦しい姿を見せまいぞ。」

橘媛は健氣にもかう言つて、泣き叫ぶ女達を制してゐら

のみならず頭上からまで、齒をむいてのしかゝる白浪の脅威に。

その中に媛の顔が物凄い蒼みを帯びて來た。同時に媛の眼には固い決心の影が見えて來た。

れたが、その中に媛の顔が物凄い蒼みを帯びて來た。同時に媛の眼には固い決心の影が見えて來た。

「おゝ、これは海神の怒に觸れたとみえる。水夫舵取等の手練位で、どうならうものではない。殿下のお爲ぢや。お國の爲ぢや。この身を海神に捧げて、殿下の危難をお救ひ申さう。さうぢや、命を捨てるのは今である。さうぢや。」

橘媛はかう決心すると、よろめきながら命の御身近くへかけ寄せられた。命は、たゞならぬ媛の様子に屹となられて、「おゝ、媛、危い。なぜ騒がれる。今少しの辛抱ぢや。」かう言ひながら、よろめきながら縋りつく媛の肩をしつ

たゞならぬ様子。

一期の願。

悲痛の色。

かりと抱へられた。媛は命の御顔をじつと見て言はれた。
 「命さま、一期の御願でござります。お暇を下さりませ。」
 「何、一期の願ぢやと。そしてまた暇とは？」
 「わたくしは殿下のお爲、お國の爲に命を捧げて、海神の怒をなだめたうござります。どうぞお許し下さりませ。」
 「お、身の爲にといふか！ 國の爲に、健氣にも命を捨てるといふのか。」
 命の御顔には見る／＼悲痛の色が浮かんだ。命は暫く無言で、波をも風をも忘れたかの如く、じつと媛を抱きしめてゐられたが、やがて涙を拂つて、
 「よう分つた。うれしく思ふぞ。帝のお國の爲ぢや。御

忍びかねるが、
 とどめもえせぬ。
 ともかくも心のまゝぢや。

一聯の勾玉。

美しい哀調。



水入の姫橋

身の健氣な決心は、我が一軍の命を救ふであらう。忍びかねるが、とどめもえせぬ。ともかくも心のまゝぢや。橘媛の眼は喜に輝いた。やがて命の仰せによつて、荒波の上に菅疊八枚、皮疊八枚、絁疊八枚が敷き重ねられる。
 媛は最後の思出に、鏡の前で装を整へた。そして、底光を含んだ一聯の勾玉を眞白な頸に懸けると、侍女の一人が薄桃色の領巾を媛の肩に着せかけた。橘媛は、命の御姿をじつと見まもつてゐられたが、やがて美しい哀調がそ

の唇を漏れた。

真嶺さし

相模の小野に

燃ゆる火の

火中に立ちて

問ひし君はも

「空に沖つた富士を仰ぐ相模の小野の焼津が原で、燃えさかる火焰の中に立たせながら、御自身の危急をば顧みずに、媛はどうした、橘媛はいかにせしとお尋ね下さつた君なるものを！」といふ意味で、かう歌つて限りなき思ひをこめた名残の眼ざしを命の御顔にそへがれたが、やがて紅の裳裾が波間に翻ると、媛の姿は、菅の皮の、繩の數々の疊と共に、見る見る浪間に沈んで、永久に人々の眼から消えて行つた。

媛の姿は、菅の皮の、繩の數々の疊と共に、見る見る浪間に沈んで。

日本... 媛... 海神... 菅... 繩... 疊... 浪間... 沈んで。

「お、媛君が媛君さまが！」

「もう御見えにならない。もうあの荒波の底に！」

「益荒男も及ばぬ、健氣なお素振でござりまする。この尊い犠牲の御行には、あらぶる海神の怒も必ず和むこととてござりませう。」

腰許達や益荒男達が取りぐに悲哀驚歎の詞を繰返す間に、命はじつと目をつぶつて歸らぬ事の追憶に耽られた。水夫等が努力の少時が過ぎると、彼等は俄かに楫の輕きを感じた。と見ると、山のやうな怒濤の大うねりが小さく小さくなつて來るではないか。空を仰ぐと、所々に雲切れがして、西日の光が美しくのぞいてゐるではないか。

俄かに楫の輕きを感じた。

海波征服の楫

東夷討伐

舵取の掛聲は生氣を帯びて來た。水夫等は甦つたやうに立ち上つて海波征服の楫を操つた。兵士どもは疲勞の身を起して、また東夷討伐の希望に燃えた。水夫等兵士等のざわめきに、命は怪訝の眼を開かれた。そして驚と喜と、限りなき感謝の念とを以て、靜まり行く海の波を、雲の切れ目からのぞく夕日の光を、望まれた。そして、

鶴の御一聲

「媛が獻身の誠心が、あの厚く重つた雲を切り裂いたのぢや。海神の怒は鎮つた。悦べ人々、もう大切な朝命も無事に果されるぞ。」鶴の御一聲に、全船すべてが生色を取りかへした。不安

雲の切れ目から現れた空は、明るいその手を伸ばすやうに擴つて行つた。

が刻々に去つて、希望はやがて彼等の心を領した。同時に雲脚が海の面から遠ざかつて、雲の切れ目から現れた空は、明るいその手を伸ばすやうに擴つて行つた。「お、空が晴れて行く。蒼い、大空が見えわたる。」もう、船を神々が護つて下さる。これも尊い媛の誠心のお蔭ぢや。「お、雲が飛ぶ。雲が飛ぶ。明るい空が擴つて行くわ。」喜の聲があちこちに聞える中に、突然舵取の甲高い聲が聞えた。「殿下さま。陸が見えます。たしかに上總でござります。もう一時の辛抱でござりまする。」

碧琉璃園
本名渡邊勝。霞亭と號した。明治大正の通俗小説家。大正十五年(三五)歿、年六十一。

「お、陸が見えるといふか。どれ！」
命は立ち上られた。舳の方へ歩いて行かれた。そして橘媛の愛と至誠とが、海神を鎮め、全軍を救ひ、國の大事を助け成した偉大なる功業を、大きな胸いつばいに、徳びつゝ、刻に近づく陸を見つめられた。
(碧琉璃園の「物語日本史」改作。)

正岡子規
前出(二三頁)

一六 俳句評釋

正岡子規

俳句の妙味は俗に説明すべからず。されど字句の解釋はさまで難きにあらず。今初學のために二三の古句を解説し、併せて多少の批評をなすべし。

文章
芭蕉の高弟、内

わが事と泥鰌の逃げし根芹かな
文章

藤氏。尾張の人。寶永元年(三四)歿、年四十五。
泥鰌を擬人して軽くおどけたるところ、文章の擅場なり。

芹は春の初のものなり。芹摘みにと手を出したれば、芹のあたりにゐたる泥鰌の捕へられんとや恐れけん、あちらに逃げ隠れたりといふ意にて、泥鰌を擬人して軽くおどけたるところ、文章の擅場なり。

蓼太
嵐雪の孫弟子。大島氏。天明七年(三四七)歿、年七十。



正岡子規

て、しかも理窟を含みたれば、世人には賞翫せらる。されど理窟を含みたるもの必ずしも善くはあらず。この句、格調頗る下品なり。俗には「三日見ぬ間の」と傳へたれども、やは

格調

り「見ぬ間に」の方宜し。「の」とすれば、全く譬喩となりて味少く、「に」とすれば櫻が主となりて實景となる故に、多少の趣を生ずべし。

去來

芭蕉の高弟。向井氏。寶永元年(一三〇四)歿、年五十四。

時鳥鳴くや雲雀の十文字

去來

時鳥は夏にして、雲雀は春なり。時鳥は春に鳴かざれども雲雀は夏も居る故、この句は夏季となるなり。時鳥は横一文字に飛ぶものにして、雲雀は下より上へ眞直に上るものなり。故に、ちやうど雲雀の上る處を時鳥が横ぎりて、恰も十文字の如くなりたるをいへり。最も巧みなる句なり。

關更

希因の弟子。高桑氏。寛政十年(一三〇六)歿、年七十三。

砂川や枕のほしき夕涼

關更

砂川に出て涼み居れば、涼しくもあり、且つは餘り砂川の

清らかさに、枕をかりてこの河原の砂の上に寝ころびたしとの意にて、輕妙なる句なり。

芭蕉

徳川時代の俳聖。松尾氏。元祿七年(一三〇四)歿、年五十一。

菊の香や奈良には古き佛たち

芭蕉

この句に於て、菊と佛とは場所の關係なし。必ずしも佛の前に菊を供へたるにもあらず、必ずしも佛堂の傍に菊の咲きたるにもあらず、強ひて場所の關係をいはば、菊も古佛も共に奈良にあるまでのことなり。作者の奈良に遊びし時、恰も菊の咲く頃なりしなるべく、随つてこの句を以て奈良を表したるなるべしと雖も、菊花と古佛との取合はせは、共にさび盡くしたる處、少しも動かぬやうに見ゆ。こゝ作者の活眼といふべし。

菊花と古佛との取合はせは、共にさび盡くしたる處、少しも動かぬやうに見ゆ。

秋風や白木の弓に弦張らん

去 來

夏時白木の弓に弦を張れば膠が剥げるとて、秋冷の候を待ちてするなり。故に「秋風や」と置けり。されども、そのみにては理窟の句にて些の趣味なし。蓋し弓は昔時に在

淡一斗糸瓜の水も間にあはず

金氣の肅殺。

白色には神聖の感あり、肅殺の感あり。故に秋の色は白とす。

疾一斗糸瓜の水も間にあはず

規 筆 蹟

りては神聖なる武器にして、戦場に用ゐらるゝはいふまでもなく、墓目

などとて妖魔を攘ふ儀式もあるくらゐなれば、金氣の肅殺たるに取合はせて自ら無限の趣味を生ずるを見る。況んやその弓は白木の弓なるをや。白色には神聖の感あり、肅殺の感あり。故に秋の色は白とす。この句、無造作に詠み

出でて男らしき處を失はず。有難き佳句なり。

蒲團着て寝たる姿や東山

嵐 雪

これは、實景を知らぬ人にはその味を解し難し。試みに京都に行きて、つくづくと東山を見るべし。低き山の近くに在りて、しかも頂の少しづつ高低あるところ、恰も人が蒲團を被りて寝たるに似たり。さればこそこの譬喩的の吟ありたるなり。品のよき句にはあらねど、滑稽と輕妙とを以て勝りたるものにて、容易に摸倣し得べからず。またこの句につきては、多くの人の氣づかざる特色あり。それは冬季といふことなり。さすがの都も冬枯れて、見るものとして淋しく寒からぬはなきが中に、かの東山を見れば、これも

嵐雪

芭蕉の門人。服部氏。寶永四年(三三七)歿、年五十四。

さすがの都も冬枯れて、見るものとして淋しく寒からぬはなきが中に。

其角
蕉門の高弟、櫻
木氏、寶永四年
(三三) 歿、年四
十七。

春頃のなまめきたる様を失ひて、たゞひつそりと寒さうに
横たはるところ、蒲團うちかぶりて寝たると見れば、淋しさ
の中に多少のをかしみもありて、何となく面白く感ぜらる
るなり。

我が雪とおもへば、輕し傘の上

普通には「我が物と思へば、輕し傘の雪」として傳はれり。

されど、「我が物」としては甚だ俗なり。「我が雪」の方に從ふべ

し。意味は解釋するまでもなし。この句、斬新を以て賞す

べし。若しこれを摸倣する者あらば、直ちに邪路に陥るこ

と必定なり。

(「俳諧大要」)

斬新を以て賞す
べし。

其角

蕉門の高弟、櫻
木氏、寶永四年
(三三) 歿、年四
十七。

杉村楚人冠

文學者

東京朝日新聞社

顧問

名は廣太郎

和歌山縣の人

明治五年生

我孫子

千葉縣東葛飾郡

の町。

木訥らしい達者
らしい様子。

にたと笑つて會
釋した。

一七七ものの出端

杉村楚人冠

上野から我孫子の宅へ歸る汽車の中で、日暮里から乗り
込んだ外國人の一行に逢つた。若い夫婦とお母さんらし



杉村楚人冠

い老女と、六つか七つの男の兒
と、總勢五人で、よく西洋の田舎
の汽車の中で出つくはすやう
な、木訥らしい、達者らしい様子
をした人々であつた。中にも

お婆さんは、丸々と太つた、いかにも人のよささうな赤ら顔
をしてゐるが、これが車に入るなり、私の方を見て、にたと笑

つて會釋したところは、まるでどこかで見たことがあるやうに覺えるほど、親しみのある様子であつた。
私はこれを見て、初はロシヤの百姓の一家族だらうと思つたが、だん／＼語り合ふ事を聞いてゐると、ドイツ語であることが分つた。

ちやうどその時、私は夕刊を讀んでゐた。その日はヒンデンブルグ將軍が大統領に當選した電報の入つた日で、その夕刊には、將軍の大きな寫眞がれい／＼と出てゐた。思ひなしか、若い細君は時々その寫眞を、のぞき込むやうに見てゐるらしかつた。
とにかくドイツの大統領が定まつたといふことは、ドイツ

Hindenburg.
世界大戰(一九一四—一九一八)當時のドイツの參謀總長。

將軍の大きな寫眞がれい／＼と出てゐた。思ひなしか、若い細君は時々その寫眞を、のぞき込むやうに見てゐるらしかつた。

NEWS.

Dr. Wilhelm Marx.

現代ドイツの政治家。當時ヒンデンブルグと大統領を争つた人。

ツ人に取つて重大なニュースである。殊に見たところ、保守的な顔をしたこの人達に取つて、ヒンデンブルグの當選は相手のマルクスのそれよりも喜ばれるに相違あるまいと思つた。日本の夕刊に始めて出たことだから、まだこの人達に分つてはゐまい。たとひヒンデンブルグびいきてなくても、知らせてやれば、さぞ喜ぶことだらうと思つた。知らせてやらうか、どうしようかと私は迷つた。私がロシヤやフランスの田舎を旅行してゐた時、時たま下手な英語で話しかけて來る人があると、嬉しいものであつたことを覺えてゐる。下手でも何でも意味が通じさへすればいいのだから、何とか言つてやらうと思つたが、何となく氣後

何となく氣後れがして言ひ出せない。

話がはずむ。

言葉が器用に口から出ない。

Latin.

れがして言ひ出せない。今まではずんでゐた夫婦母子の話が途切れ々になつて、何心なく私の方を見やる時、今度こそは言はうと思つたが、その度毎に決心が鈍つた。これが英語でいふものなら、すら／＼とまでは行かぬが、格別考へずに用を辨ずるだけの言葉は出て来る。フランス語にしても、どうやらかうやら、考へればそれ位の意は通ずることが出来る。だが、何分ドイツ語と來ては、三十年前に習つたきりで、曾て使つたことがないのだから、どうしても言葉が器用に口から出ない。

第一「大統領」のことをドイツ語では何といふのであらうか。フランス語ならラテン系統の言葉だけに、英語のプレ

president.
Teuton.

telephone.

fernsprecher.

目のかたきにする。
見す／＼分つてゐながら。



グルナンデンヒ

シデントが直ぐ通ずるに極つてゐる。チュートン語原のドイツ語では、さうは行くまい。國語のやかましいドイツのこととて、誰にも通ずる「テレフォーン」ではギリシャ臭いといつて、「フェルンシュプレツヘル」とやら言ひ直して喜んでゐる國語擁護運動さへあると聞いてゐる。うっかりラテン臭いプレシデントなど言つて、目のかたきにしてゐるフランスのひいきでもする者のやうに思はれてはつまらない。況んや相手が見す／＼ドイツ人と分つてゐながら、英語で話しかけるのも氣が利かな

出端を失ふ。
あつさりとや
る。

無上に氣ばかり
せかくする。

い。お前等の話してゐるのはドイツ語であることを、おれ
はちやんと知つてゐるぞ、と示してやりたい一種の虚榮心
もある。出端を失ふといふことは妙なもので、初にあつさりとや
つてしまへば、何でもなかつたらうに、今になつては、何とも
取りつきやうがない。さりとして、知らせずにしまふのも何
だか残念な。

どこで下車するか分らぬから今の内に話さなければ、せ
つかく喜ばせようとする、好意が無になる。無上に氣ばか
りせかくする。龜有の停車場近くになつて、到頭思ひ切つて、新聞の寫眞

を男の前につき出しながら、この人が大統領になりました
よと、英語でやつてしまつた。
「さうですか、昨日が選挙でしたね。どうも、有難う。」と男は
私より遙かに上手な英語ですらくと答へた。なァんの
事だと、私は思つた。

しかしその男が寫眞を細君に見せて、二人で私の方へ挨
拶した時、この話を夫婦から聞いたお婆さんが、非常な喜
び方で、「オー、オー、ヒンデンブルグ！」と、幾たびか例の人なつ
こい眼を私に向けて禮を言つた時、
私はよい事をしたと思つた。

白鳥省吾

詩人

宮城縣の人

明治二十三年生

一八海二題

一 元旦の挨拶

白鳥省吾

日の出よ。

朝の海よ。

ともに太古のままだ。

大昔は昔は

永久に若々しい鼓動を持つ海は、

いま日を送り出した喜に顫へてゐる。

永久に若々しい光を放つ日は、

いま海から生まれた喜に微笑んでゐる。

福田正夫

詩人

神奈川県の人

明治二十六年生

二 月かかりて空に

福田正夫

月かかりて空にある時、

砂を踏みながら歸つてゆく漁夫の群。

渚には光砕け、光砕け、

波の音吼えて、

chorus.

濁聲だみごゑに語る彼等と共にコーラスをつくる。

ああかかる一瞬、

かかる一瞬ありて海に住む者は幸福だ。

一九 手紙二趣

一 つゝじの一輪を封じこめて

かざした花の名
残。
燃えるやうな色
を庭の一隅に輝

封の中の萎れた一輪は、この春わざ／＼送つて下さつた
躑躅が美しくかざした花の名残です。花はたゞ一輪でし
た。そしてそれが六月の一日―舊曆の五月一日―に咲き
はじめ、七日の間燃えるやうな色を庭の一隅に輝かして、八

かして。

花にもやはりお
里開きが楽しみ
だらうと。

日の夕方いさぎよく散りました。初から「臯月」の一種だら
うと思つて居りましたが、果して眞紅の臯月でありました
ので、「阿蘇臯月」と名をつけました。

人間の嫁御寮には、「お里入り」といふ事が大層楽しみなも
のだと聞いてゐます。同じ命のあるものならば、花にもや
はりお里開きが楽しみだらうと思ひ、せめて名残の姿なり
とも、里の親御のお目に向け、大阿蘇のすゞしい風に吹かせ
たいと思つて、萎れた花びらを包んで、この一封を捧げます。
御阿蘇様の見えるお庭あたりの土の一部として下さらば、
養親たる私に取つてこの上もない喜です。

阿蘇つつじ臯月のつつじ一日に

うつくしく咲きて八日に散れり

花の心をしのびつつ

はるかに阿蘇のふもとをぞ思ふ（「水莖」）

二 京都にゐる婆やに

婆や、おかはりなしですか。京都のお正月はどうでした。

大分様子もわかつて来て気がらくになつたでせう。京都

は美しい山に圍まれた美しい都だから、住んでみると、もう

たまらなく好くなつて離れたくないやうな心持になるで

せう。京都の言葉は優しいでせう。婆や（葉野の人）まねが出来ます

か。やつぱりお國言葉でおし通してゐるだらうね。それ

京都は美しい山に圍まれた美しい都。

福の神に逃げられたやうな。

がいよ、それがいよ。

お正月は来たが、福々しい婆やの顔が見えぬので、何だか

福の神に逃げられたやうな、妙に淋しい氣がしますよ。寒

さにもからだに障はありませんか。水が變ると、どうして

も患わづひ易いといひますから、氣味が悪いなどと大層心配し

て行つたが、京都は水もいよし、氣候もよい所だらうから、そ

んなことはないでせう。どうか無理をしないで、丈夫でお

いでなさい。

赤ん坊はもう笑ふでせう。今頃は婆やの温かいふとこ

ろにくるまつて、なでられ頬ずりされて、赤ちやん目をなく

して他愛もなく笑つてゐることとせう。婆や、可愛いでせ

うね。

東京も何十日か天氣が續いて、雨も雪もみぞれも何にも降りません。毎日二月のから風（原風）のやうな、たちの悪い風が吹くので、廊下（つち）が土埃（ぼろ）で眞白になります。唇が乾く、井戸の水が減る、喉がいらくする、ほんとに仕様がありません。しかしみんな丈夫であるから、安心しておくれ。

その中お春さんに書いて貰つて、様子を知らせて下さい。寒いから用心なさい。さやうなら。

海上龍子

歌人
福島縣の人

二〇 一樹の蔭、一河の流 海上龍子

影にそふ形のごとく亡き靈も

君を守りて離れざりけん

夏の陣
元和元年(三七五)

大阪夏の陣に木村重成が花の討死を遂げたるは二十一歳の若盛りなりき。彼に妻あり、二年前に娶（よめ）れるにて、今年十八歳、眞野豊後守頼包（よしかね）が女（めかけ）にて、姿美しく、心優にして、操極めて高かりき。

去年
慶長十九年(三七七)

彼女は昨日今日夫の氣色常とかはりて、食事をさへ斥けつゝ、深き物思に沈めるを見て怪しめり。去年の十二月二十二日には、和議の御誓文御取交しの使者となり、單身敵陣に乗り込みて、主命を辱しめず、しかもその威風は關東武士を壓し、大御所をして感涙を催さしめたる大勇の夫が意氣の、この頃頼（たの）に沈みがちなるは何事かと訝（うたが）れり。

大御所
徳川家康

今福
現在は大阪市東
成區鯉江町。

彼女は遂に意を決して夫の前に出てたり。去年今福の合戦にて、向ふに敵なき君の勇戦には、關東五十萬の大軍皆舌をまきて驚きしと傳へ聞き侍る。今や御家の御武運旦夕に迫れり。君家の御恩に報い給ふも、今この時とこそ思ひ侍れ。さるを何とて、この日頃食事をさへ斥けて物思には沈ませ給ふぞや」と問ふ。重成莞爾と打笑みて、御身の怪しみ理なり。餘の儀にはあらず。五穀胃に入りて二十四時を経ざれば消えずとかや。主家の安危は御身の言はるゝが如し。いつ討死せんも圖りがたき折からなり。穢き物を斥けて死



夏

夜半の嵐も吹か
なく、難波の
春に先立ちて、
散り行く梅の花
一輪。

後の身を潔く保たんこと、武士たる者の嗜みには侍らずや」と答ふ。彼女はこの一言に心を安んじたるものの如く、しづかに己が室に退きしが、夜半の嵐も吹かなく、難波の春に先立ちて、散り行く梅の花一輪、彼女の最期こそ悲しくも健氣なりけれ。重成は妻が喉笛搔き切りて、見事なる自害を遂げたるに、且つ驚き且つ悲しみつゝ、あたりを見れば、一通の遺書あり。披き見れば、水莖の跡も鮮かに、



陣の (筆音頼堀小)

一樹の蔭、一河の流
一樹の蔭に宿り、一河の流を汲むも、皆これ他生の縁といふこと、昔白拍子の謠物なり。
(諺艸)

項羽
楚の王。漢の劉邦(高祖)と戦つて敗死した。(日本紀元四五九)

虞氏
項羽の寵姫。

木曾義仲
源為義の孫、義賢の子。壽永三年(八四四)歿、年三十一。

松殿の局
關白藤原基房(松殿と稱す)の女。

一樹の蔭、一河の流皆これ他生の縁と承り居り候が、さてをもとせの頃ほひ偕老の契をなしてより、たゞ影の形に添ふが如く思ひまゐらせ候に、この頃承り候へば、この世限りの御催の由、蔭ながら嬉しく思ひまゐらせ候。楚の項羽とやらんは世に猛き武士なれど、虞氏のために名残を惜しみ、木曾義仲は松殿の局に別れを惜しみきとかや。されば世に望窮りし妾が身にては、せめて御身の御在世の中に最期を致し、死出の道とやらんにて待ち上げ奉り候。必ず、秀頼公多年海山の御鴻恩御忘却なきやう頼み上げ参らせ候。あら、かしこ。さて、健氣なる覺悟やと、疾くに死を決したる重成は、妻

光風霽月。

の最期によりて、後髪ひかる、憂もなく、光風霽月のすがすがしき心地さへ加りて、やがて元和元年五月六日、心ゆくばかり戦ひをさめて後、薫りゆかしき兜の首を敵の手に渡したり。
あはれ若木の櫻は散りたれども、髻にこめられたる蘭麝の薫は忠義の名と共に永へに匂ひて、今に滅びず。これと相並びて、美しさを争ふは身を殺して夫の大義を成せる若き妻の最期なり。「一樹の蔭、一河の流」十八歳の若き妻が命をこめたる美しき水莖のあとよ。あはれ我が婦道を照らす永久の光ならずや。
(「たのもしき婦人」に據る。)

新井白石

江戸の學者
將軍家宣の侍講

名は君美

享保十年(三六五)

歿、年六十九

天正十三年

(三四五)

徳川殿

徳川家康。

祈らぬ神佛もな
く、立てぬ願も
なし。

重次

本多重次。

慶長元年(三五六)

歿、年六十八。

二一 鬼作左の嬉し泣き 新井白石

去にし天正十三年三月に、徳川殿御背中に疔ちゆうといふもの
出来て、既に危く見えさせたまひしかば、内外の醫療術を盡
くしけれども、その驗しるしなく、たゞ弱りに弱らせたまひ、自らも
これ迄と思し召しけるにや、宗徒の御家人等召集めて、御跡
の事ども仰せおかる。人々の周章いふに及ばず、士民百姓
等に至るまで、その程々に隨ひて、祈らぬ神佛もなく、立てぬ
願もなし。重次御枕に取りつきて泣く／＼申しけるは、「殿
も定めて覚えさせ給ひなん、重次が昔この病を受けしに、立
ちどころに驗得しるしし良醫の候、彼を召して見せ試み給ふべし。」

御心がらとはい
ひながら、あつ
たらしき命か
な。



と申す。「諸醫既に手を束ね、家康また死を決す、この上醫療
その詮なし、且つは命惜しむに似たり。」とて、用る給はず。重
次大きに怒つて、「かほど大事の腫物かろ／＼しく思し召し
侮つて、事急なるに臨めばこ
新 新 諸醫も術盡きぬれ。それ
井にまた良醫して治しまゐら
白 白 せんとするをも用る給はず。
石 失せ給はん事御心がらとは
いひながら、あつたらしき命
かな。諸醫術盡きぬと申す上は、彼等いかでか治しまゐら
すべき。年老いたる重次が、御跡にさがつて、御供叶ふべか

見苦しい殿原の止めやうや。

らず。さらば御先へ參らん。」とて、御前を罷り立つ。徳川殿大きに驚かせ給ひ、「あれ止めよ。」と仰せければ近く侍らふ人走り出で引きとゞめ、「仰せらるべき旨あらせられ候。」といふ。重次大きに聲を怒らして、「最期の暇乞うて罷り申す者を見苦しい殿原の止めやうや。」と罵つて出でんとす。「されば候、その人を止めよとの御使が、えこそ止めね、と申せとは、おとなしくも候はぬ本多殿。」と言はれ、げには、さも候。」とて、御前にまゐる。徳川殿、「汝は物に狂ひてかくはいふか。家康未だ死しはてぬに、たとひ家康が命終るとも、汝等が世にあらんを頼みにこそ死すべけれ。また汝等も如何にもして一日も世に残りて、若き者ども掟して、我が家の絶えざらん

詮なき死の供せんとする事やある。

犬死せん人の御供その詮なし。

負はぬ手も候はず。

御聲北條殿北條氏直、その妻は家康の女督子。

様を計らんとは思はずして、詮なき死の供せんとする事やある。」と仰せければ、「いや、それは人に依つての事に候。重次も今少し年だに若く候はんには、仰せまでも候はず。



本多重次

犬死せん人の御供その詮なし。重次若年の昔より、こゝかしこの軍に従つて、眼射られ、指落され、足斬られて、負はぬ手も候はず。人のかたはといふ程のかたは、重次が身一つに集つて、世に交らん事、叶ふべき身ならず。殿の御情深ければこそ、當家にては人に恐れも慕はれも仕りつれ、殿のなくならせ給ひなば、他人までも候まじ、まづ御聲の

亡ぼされん事また踵をめぐらすべからず。

後指さゝれん事。

武田の家人等
武田勝頼の遺臣をいふ。

北條殿、我が國々を取らんとし給はんに、若き人々が、行末久しう仕へんと頼み切つたる主に、忽ちに別れて、氣おくれし、はかしくしき矢の一筋をも射出だすこと叶ふべからず。當家亡ぼされん事また踵をめぐらすべからず。重次それまでながらへて、あの年寄つたるかたは者は、徳川殿の譜代にて、某（五にがし）といはれし家人なるが、いかに惜しき命なれば、かく世には恥をさらすらんと、後指さゝれん事、老の恥何事かこれに過ぎ候べき。この頃までも、武田の家人等御當家に召されて、さらぬ人にも手を束ね、膝を屈めしを、世にも哀れに思ひしが、今はこの老人めが身の上になつて候と存ずれば、殿に後れ參らせんが悲しきばかりにも候はず、我が身の果

汝が言ふところ
道理至極せり。

も淺ましさに、まづ御先に死する事にて候」と申す。「汝が言ふところ道理至極せり。さらば醫療の事は汝が心に任すべし。天命既に至りて、家康空しくならんとも、汝もまた家康が心に任せ、如何なる恥を見つべくとも、一日も生き残つて、後の事よきに計ふべしと存ずるや、いなや」と仰せければ、「重次が申す旨に任せられんには、重次いかでまた仰せを背き參らすべき」と申す。さらば醫師召させよとて召さる。醫師やがて參つて、御灸治よろしかるべしと申せば、重次艾とつて据うる。御灸の痛み覚えさせ給はねば、艾を増し加ふる事多くして、後いさゝか痛ませ給ふよし仰せければ、御薬をつけて參らせ、御薬湯をも進め奉りしに、その夜の半ば

聲を限りに泣く。

菊池 寛

小説家、文學者
高松市の人
明治二十二年生

將軍家茂

安政五年(二五〇)
將軍宣下。慶應
二年(二五六)歿、
年二十一。

雲と書き始めた文句が雨とならないうちに筆がのたくつて、龍のやうな滅茶苦茶な曲線を幾つも書いてゐる。

に、御腫物潰れて、膿水血夥しう流れ出でて、御惱み立ちどころに輕ませ給へば、重次は嬉し泣きに聲を限りに泣く。御前伺候の人々も、感涙を共に流しけり。
(『藩翰譜』)

二二名君

菊池 寛

十四代將軍家茂公は、先刻から悪戯ばかりしてゐる。戸川播磨守が懸命に書いた千字文の中の「雲騰致雨露結爲霜」といふ楷書の立派なお手本の方などは見向きもしないで、奉書のお草紙の上に、やたらに筆をのたくらせてゐる。雲と書き始めた文句が雨とならないうちに筆がのたくつて、龍のやうな滅茶苦茶な曲線を幾つも書いてゐる。一番最

ちる
しもと
リス
シユ

雲中の龍

初の雲といふ字でさへまだはつきりとした形を成してゐない。まして騰るといつたやうな難しい字は、まるで書く志がないらしい。雲の形が中途から崩れ出して、雲中の龍



のやうな、でたらめな曲線になつてしまふのである。そして時々眼がお草紙から離れて、傍の金蒔繪の火鉢の方に移つて行く。が、その火鉢の手觸りの

二間
疊を縦に二つの距離。一間は約百八十二センチ。

柔かさうな灰に、立てられてゐる線香は、まだ半分もたつてゐない。それを見るといよゝ退屈し始めた十四代將軍は、二間ばかり下座に畏まつてゐるお氣に入りの小姓の一

目顔で笑ひかける。眞面目くまつてゐる。混沌。

人に、目顔で笑ひかけて見る。が、小姓が案外眞面目くまつてゐるので、また仕方なしにお草紙に雲と書き始める。が、雲はいつまで経つても混沌としたまゝである。雲と書き始めた筆が自由に活潑に紙の上を無意味に一巡すると、家茂公は手荒く新しい紙をめくる。さつきから何枚眞新しい御献上物の奉書が無駄にしたか知れない。奉書のお草紙は十五枚綴ぢになつてゐる。線香の方はともかくも、お草紙の方さへ片が附けばその日のお稽古は終つたことになるの



徳川家茂

線香がなかく、たゝないと見て取つた家茂公は、今度は非常手段に出て、お草紙の方をなすり潰さうとしてゐる。

戸川安清
安政六年(五二)家茂の傳准小姓組番頭となる。時に年七十。明治元年(五二)歿。年八十二。

だ、線香がなかく、たゝないと見て取つた家茂公は、今度是非常手段に出て、お草紙の方をなすり潰さうとしてゐるのである。戸川播磨守安清は默然として家茂公の亂行を見てゐた。彼が習字のお相手として召出だされてから、まだ一月も経つてゐない。片假名やいろは假名のお稽古が濟んで、漢字のお習字に移ることになつて、彼はお相手として特に召出だされたのである。林家の人々などを差越えてのかうした沙汰は、彼としては絶大な名譽であつた。彼は老後の凡てをお役目のために盡くさうとしてゐる。そして將軍家の御手蹟を少しでもよくすれば、この上の御奉公はないと

思つてゐる。

ところが、肝腎の家茂公は、彼が手を執つて教へ始めてから、一字一畫も眞面目に書いたことがない。いろは假名の稽古のお相手が、大奥の中藤であつたためだらう、習字といへばたゞ悪戯をして時間を潰しさへすればいゝと思つてゐるらしい。

幼少の折から嚴しい師に就いて、一點一畫も忽せにしないやうにと教へられた播磨守は、書道に對して可なり敬虔な心持を懷いてゐる。彼は口を漱いで、手を淨めた後でなければ筆を執つたことさへない。それなのに、家茂公は彼の面前で悪戯ばかりしてゐる。字を書くことの尊さを少

播磨守は、書道に對して可なり敬虔な心持を懷いてゐる。

家茂公の爲すことがすべて播磨守の心を痛めた。七十を三つも越してゐる一徹な播磨守の心を痛めた。御不興を蒙る。

しも知つて居られない。慰み事か、弄び事か、何かのやうに書を瀆してゐる。家茂公の爲すことがすべて播磨守の心を痛めた。七十を三つも越してゐる一徹な播磨守の心を痛めた。彼は、どうにかして主君のかうした心掛を矯さなければならぬと思つた。そのためにはたとひ御不興を蒙らうとも、お役御免にならうとも、厭ふところはないとまで思つてゐた。お稽古の日が重なるに連れて彼の決心は愈堅くなつて來た。ところが今日は家茂公の悪戯がいつもよりもつとひどい。一字だつて眞面目には書かれな

いのである。白絹のやうにつや／＼と光る奉書を、五六枚も無駄にし

家茂公ははッと本能的に駭かれた。

播磨守はびくともしなかつた。

播磨守はいつかな放さなかつた。

て、更に幾枚目かの紙にてたらめな曲線を書かれようとした時である。播磨守は無言のまゝ、家茂公の筆を持つた掌をキユツと握りしめた。家茂公ははッと本能的に駭かれたやうであるが、直ぐ子供ながらに自分の位置の優越を思ひ出されると、威壓的な烈しい目附で、播磨守の顔をじつと見られた。が、播磨守はびくともしなかつた。彼は柔かい小鳥のやうな生温い掌を、意識して、少しは懲罰的に痛さを感じせしめる位に強く握りしめながら、奉書の上に「雲騰致雨露結爲霜」と書かせた。家茂公は筋ばつた掌で握りしめられる痛み不堪へかねて、途中で二三度振りほどかうとした。が、播磨守はいつかな放さなかつたが、その八字がすつかり

青磁の水入

白髪の頭

書き了へられた時である。播磨守がその堅い把握の手を緩めて、じつと両手を膝に置きながら、公が書いたといふよりも、自分の書いた八字に眺め入つた時だつた。赤くなつた右の掌をじつと見てゐた家茂公は、机の上にあつた青磁の水入を持つて立ち上がると、いきなりたつぷりと湛へられてゐた水を播磨守の白髪せがらの頭へざぶりとかけたまゝ、「わあッはゝゝ、わあッはゝゝ」と笑ひながら、大奥の方へ走り込まれたのである。一徹な播磨守は、主君から幼少な年齢から來る悪戯いたづらであるとはいへ、烈しい侮辱を受けたので、頭から落ちる雫しずくを拭ぬぐひもやらず、机に両手をかけたまゝ、暫くは身動きもし

餘りなお悪戯ぢや。御幼少であるとはいへ、餘りな御亂行ぢや。

井伊侯に申し上ぐるなど、輕はずみな事をして下さるな。今日

ないで考へ込んだ。

駭いて馳け寄つたお側衆の小出勢州は懷紙を出して、播磨守の額から顎にかけて拭き下しながら、

「餘りなお悪戯ぢや。御幼少であるとはいへ、餘りな御亂行ぢや。御主君とはいへ、心外でござらう。拙者から御大老に申し上げて、きつい御諫言を申し上げることに致さう。御勘辨なされい。」と、氣の毒さうに慰めた。

播磨守は默然として勢州の拭くのに委せてゐたが、濡れた上下の威儀を正すと、心持聲を落しながら、

「井伊侯に申し上ぐるなど、輕はずみな事をして下さるな。今日といふ今日は、上様の御仁慈のほどが骨身に徹へ申し

といふ今日は、上様の御仁慈のほどが骨身に徹へ申したわ。

たわ。勢州殿有様は斯様でござる。拙者今日はお机の前に坐つて以來頻りに小用を催したのをじつと辛抱致し居つたところ、老年の悲しさには、懸命にお手を執つた砌、つい失念して少々洩らしたのでござる。君前に於てかゝる

大不敬を犯した事が、若し大目附の耳に入らうなら謹慎閉門はおろか、切腹の御沙汰



像銅彌直伊井

にも至らうかと、心も心ならず苦慮致し居つたのを、それとお察し遊ばした上様は、拙者の失策を御自身の悪戯で掩ひ隠して給はつたのぢや。御仁慈のほど骨身に徹へ申した

あつとばかり膝を叩いて、家茂公の聰明な仁慈に感歎の聲を上げたのである。

井伊直弼
彦根城主。幼名鐵之助。安政五年(三二)四月大老となり。萬延元年(三五)兇刃に斃れた。年四十六。

わ。」と、播磨守は老いた兩眼に涙をひたくと湛へてゐたのである。

小出勢州を始め並みある近習達は、あつとばかり膝を叩いて、家茂公の聰明な仁慈に感歎の聲を上げたのである。

その事があつてから、この逸話は江戸城の隅から隅へと傳へられた。登城する大名の一人から一人へと傳へられた。皆が異口同音に名君家茂公の君徳を讃へぬ者はなかつた。たゞこれを聞いた大老井伊直弼だけは、話を半分ほど聞くと眉をひそめながら、「お悪戯にも程のあつたものぢや。」と言つたまゝ、話手が家

茂公を讃め上げるのを聞いても、にこりともしなかつた。

二三 大川の水

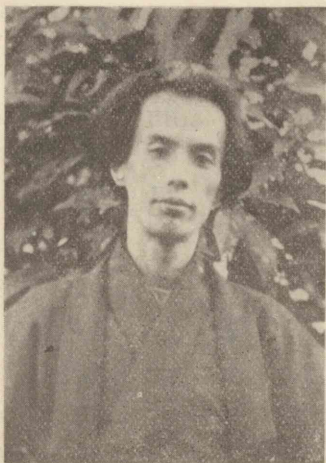
芥川龍之介

芥川龍之介
大正の小説家
東京の人
昭和二年(二五七)歿、年三十六

自分は、大川端に近い町に生まれた。家を出て若葉に掩はれた、黒堀の多い横網の小路を抜けると、すぐあの幅の広い川筋の見渡される、百本杭の河岸へ出るのである。幼い時から、中學を卒業するまで、自分は殆ど毎日のやうに、あの川を見た。水と船と、橋と、砂洲と、水の上に生まれて水の上に暮してゐる慌しい人々の生活とを見た。眞夏の日の午

すぎ、燻けた砂を踏みながら、水泳を習ひに行く通りすがりに、嗅ぐともなく嗅いだ河の水のほひも、今では年と共に、

水を見る毎に、
何となく、涙を
落したいやう
な、言ひがたい
慰安と寂寥とを
感じた。
なつかしい思慕
と追憶との國に
はひるやうな心
持がした。



芥川龍之介

親しく思ひ出されるやうな氣がする。
自分はどうして、かうもあの川を愛するの
か、あのどちらかといへば泥濁りのした大川の生温かい水に、限りないゆ
かしさを感じるのか。自分な
がらも、少しくその説明に苦し
まずにはゐられない。たゞ自
分は、昔からあの水を見る毎に、
何となく、涙を落したいやうな、
言ひがたい慰安と寂寥とを感じた。全く、自分の住んでゐ
る世界から遠ざかつて、なつかしい思慕と追憶との國には
ひるやうな心持がした。この心持のために、この慰安と寂

銀灰色の靄と、
青い油のやうな
川の水と、吐息
のやうな覺束な
い汽笛の音と、
石炭船の鳶色の
三角帆と、すべ
て止み難い哀
愁を喚び起すこ
れらの川の眺
は、いかに自分
の幼い心を、そ
の岸に立つ楊柳
の葉の如くをの
のかせたことであ
らう。
靜平な讀書三昧
に耽つてゐる。

寥とを味はひ得るために、自分は何よりも大川の水を愛す
るのである。
銀灰色の靄と、青い油のやうな川の水と、吐息のやうな覺
束ない汽笛の音と、石炭船の鳶色の三角帆と、すべて止み
難い哀愁を喚び起すこれらの川の眺は、いかに自分の幼い
心を、その岸に立つ楊柳の葉の如くをののかせたことであ
らう。
この三年間、自分は山の手の郊外に、雑木林の蔭になつて
ゐる書齋で、靜平な讀書三昧に耽つてゐたが、それでも猶ほ、
月に二三度はあの大川の水を眺めにゆくことを忘れなかつた。
動くともなく動き、流るゝともなく流れる大川の水

長旅に出た巡禮が、漸くまた故郷の土を踏んだ時のやうな、さびしい、自由ななつかしさに融かしてくれる。純なる本來の感情に生きる。

aradia.

の色は、静寂な書齋の空氣が休みなく與へる刺戟と緊張とに、切ない程あわたゞしく動いてゐる自分の心をも、ちやうど長旅に出た巡禮が、漸くまた故郷の土を踏んだ時のやうな、さびしい、自由ななつかしさに融かしてくれる。大川の水があつて、始めて自分は再び純なる本來の感情に生きることが出来るのである。自分は幾度となく、青い水に臨んだアカシアが、初夏のやはらかな風に吹かれてほろ／＼と白い花を落すのを見た。自分は幾度となく、霧の多い十一月の夜に、暗い水の空を寒さうに鳴く千鳥の聲を聞いた。自分の見、自分の聞くすべてのものは、悉く大川に對する自分の愛を新たにする。ち

夏川の水から生まれる黒蜻蛉の羽のやうな、をのゝき易い少年の心。驚異の眸を見はらずにはゐられない。

やうど夏川の水から生まれる黒蜻蛉の羽のやうな、をのゝき易い少年の心は、その度ごとに新たな驚異の眸を見はらずにはゐられないのである。殊に夜網の船の舷に倚つて、音もなく流れる黒い川を凝視しながら、夜と水との中に漂ふ「死」の呼吸を感じた時、いかに自分は、たよりのない淋しさに迫られたことであらう。この大川の水に撫愛される沿岸の町々は、皆自分に取つて、忘れ難いなつかしい町である。吾妻橋から川下ならば、駒形、並木、藏前、代地、柳橋、或は多田の薬師前、うめ堀、横網の川岸——どこでもよい。これらの町々を通る人の耳には、日を受けた土藏の白壁と白壁との間から、格子戸づくりの薄暗

硝子板のやうに青く光る大川の水。

あゝその水の聲のなつかしさ、つぶやくやうに、拗ねるやうに、舌うつやうに、草の汁をしぼつた青い水は、日も夜も同じやうに、兩岸の石崖を洗つてゆく。

河竹默阿彌
幕末明治の劇作家、本名吉村芳三郎、明治二十六年(西曆一八九五年)歿、年七十八。

い家と家との間から、或は銀茶色の芽をふいた柳とアカシアとの並樹の間から、磨いた硝子板のやうに青く光る大川の水が、その冷やかな潮の匂と共に、昔ながら南へ流れるなつかしい響を傳へてくれるだらう。あゝ、その水の聲のなつかしさ、つぶやくやうに、拗ねるやうに、舌うつやうに、草の汁をしぼつた青い水は、日も夜も同じやうに、兩岸の石崖を洗つてゆく。班女といひ、業平といふ、武藏野の昔は知らず、遠くは多くの江戸淨瑠璃作者、近くは河竹默阿彌翁が、淺草寺の鐘の音と共に、その殺し場の氣分を、最も力強く表すために屢、その世話物の中に用ゐたものは、實にこの大川のさびしい水の響であつた。

自分の記憶に誤がないならば、

殊にこの水の音をなつかしく聞くことの出来るのは、渡し船の中であらう。自分の記憶に誤がないならば、吾妻橋から新大橋までの間に、元は五つの渡しがあつた。その中で、駒形の渡し、富士見の渡し、安宅の渡しの三つは、次第に一つづつ、いつとなく廢れて、今ではただ一の橋から濱町へ渡る渡しと、御藏橋から須賀町へ渡る渡しとの二つが、昔のまゝに残つてゐる。自分が子供の時に比べれば、河の流も變り、蘆荻の茂つた所々の砂洲も跡方なく埋めら



清洲の橋の美觀

水の動くのにつ
れて、搖籃のや
うに軽く體をゆ
すられる心地よ
さ。

れてしまつたが、この二つの渡しだけは、同じやうな底の淺い舟に、同じやうな老人の船頭を載せて、岸の柳の葉のやうに青い河の水を、今も變りなく日に幾度か横ぎつてゐるのである。自分はよく、何の用もないのに、この渡し船に乗つた。水の動くのにつれて、搖籃のやうに軽く體をゆすられる心地よさ。殊に時刻が遅ければ遅いほど、渡し船のさびしさとうれしさとが、しみじみと身に沁みる。低い舷の外は直ぐに緑色の滑かな水で、青銅のやうな鈍い光のある、幅の廣い川面は、遠い新大橋に遮られるまで、たゞ一目に見渡される。兩岸の家々は、もう黄昏の鼠色に統一されて、その所々には障子にうつる灯の光さへ黄色く靄の中に浮かん



(垂馬柳崎島)

し渡の屋竹

竹屋の渡し

江戸の昔の墨田川、向島の一帯は、都人士に取つて第一の行樂の地であつた。そして時變り星移つても、今の吾妻橋から竹屋の渡しあたりにかけては、明治の中期に於ては、昔の面影を留めて、東京市民の遊樂の向となつてゐたものである。そして本文「大川の水」にもある通り「同じやうな底の浅い船に同じやうな老人の船頭を乗せた渡し船」が日に幾度となく往復して、乗り合はせた老若男女も、何となく浮世を離れた周囲の風光を眺めながら氣も伸びしと語り合ふといふやうな風情のあつたものである。この繪の作者島崎柳塘氏は、正にかういふ時代に生まれ江戸つ子で、その當時の乗合船の樂しさを忘れかねてこの作を物したのであらう。この表現が和やかな風情を述べて、そこに一つの物語が浮かび出でやうに見えるのもそのためであらう。

柳塘氏、名は友輔、明治元年に生まれ、故松本楓湖、川端玉章等に學んだ。川端畫學校の教師ともなり、文展は第一回の「西鶴のお夏」(三等賞)を出品して以來、帝展に改つても引續き出品を怠らず、日本美術協會の幹部、帝展審査員として重きをなし、専ら江戸風俗や舊東京の面影を描いて斯界に異彩を放つてゐる。

舵を執る人の有無さへもわからない。

である。上げ潮につれて灰色の帆を半ば張つた傳馬船が、一艘、二艘と稀に川を上つて來るが、どの船もひつそりと静まつて、舵を執る人の有無さへもわからない。自分はいつもこの静かな船の帆と、青く平に流れる潮のほひとに對して、言ひやうのないさびしさを感ぜずにはゐられないのである。

けれども、自分を魅するものは獨り大川の水の響ばかりではない。自分に取つては、この川の水の光が殆どどこにも見出だし難い滑かさと暖かさとを有つてゐるやうに思はれるのである。

吾妻橋、厩橋、兩國橋の間、香油のやうな青い水が、大きな橋

船宿の白い行燈をうつし、銀の葉裏を翻す柳をうつして、靜かに光りながら流れる。

殆ど比喩を絶した、微妙な色調。

臺の花崗石と煉瓦とをひたしてゆくうれしさは言ふまでもない。岸に近く、船宿の白い行燈をうつし、銀の葉裏を翻す柳をうつして、靜かに光りながら流れるのも、その重々しい水の色にいふべからざる溫情を藏してゐる。

殊に日暮に、川の上に立ちこめる水蒸氣と、次第に暗くなる夕空の薄明りとは、この大川の水をして、殆ど比喩を絶した、微妙な色調を帯びしめる。自分はひとり、渡し船の舷に肘をついて、もう靄の下りかけた薄暮の川の水面を、何といふこともなく見渡しながら、その暗綠色の水のあなた、暗い家々の立ち並んだ空に、大きな赤い月の出るのを見て、思はず涙を流したのを、恐らく終世忘れることが出来ないであ

らう。

〔芥川龍之介全集〕

三木露風

詩人
名は操
兵庫縣の人
明治二十二年生

二四 紅 椿

三 木 露 風

山越えて來たふるさとの、
家の籬にただ一つ、
紅い椿が咲いてゐる。

ああ紅椿紅椿

ありし昔をそのままに、
夢ともならで咲く花よ。

ゆめともならで咲く花よ。月夜に月をみて

昨日吹いたる西風は
遠い響となつて消え、
今日麗かな海の町。



三 木 露 風

あゝ西風の止んだやう、
わが悲しみも過ぎ去つて、
ひとりしみじみ海を見る。

ふるさとのふるさとの、
家の籬の紅椿、
その葉を越して

海を見る

穂積律之助

海軍造船少將
東京の人
明治十七年生

bridge

二五 潜水艦上の或日

穂積律之助 (講演)

或國と或國と戦半ばの或日に、あなた方が私と一緒に、一隻の潜水艦に乗つて荒波を航行してゐると思つて下さい。波のまにまに揺籃のやうに動揺する狭いブリッジの波除け板に身を寄せて、鋭い眼で、じつと行手を睨んでゐるのは我等の艦長です。彼は今、突然そばに立つてゐる中尉を呼んで、黙つて、或方向を指さしました。二人は急いで、雙眼鏡をかざして、二言三言さゝやき合ひました。二人はやがて目を雙眼鏡から離しますと、張り切つた顔の筋肉を少し

互に會心の微笑を漏らしつゝ、

嵐の前の静けさといつた緊張した沈黙。

Disseal.

motor

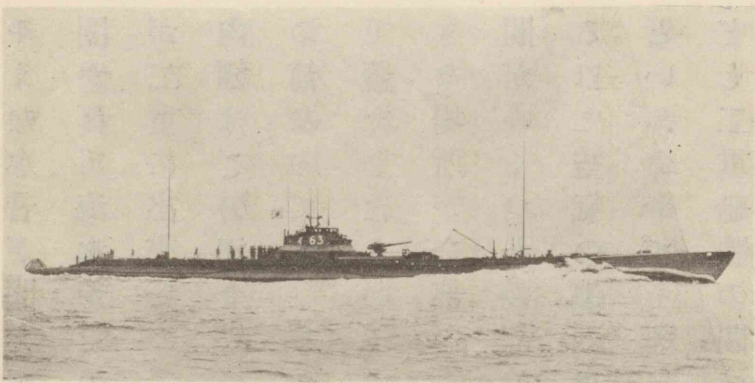
ゆるめて、互に會心の微笑を漏らしつゝ、うなづき合ひました。だが、やがて、

「潜行準備！」

嚴かな艦長の命令が、艦内に響き渡りました。一分！

二分！ 嵐の前の静けさといつた緊張した沈黙が、暫くつづきます。

その中に艦長は「潜航！」と鋭く叫びながら、司令塔に飛び込みました。中尉も、つゞいて内へ飛び込みながら入口の鐵蓋をバタリと閉ぢて、手早くこれを締めつけました。同時に今まで規則正しい響を傳へて運轉してゐたディーゼル機關がピタリと止つたかと思ふと、電氣のモーターがブ



ンブンと鈍い唸り聲を立てて廻り出しました。すべて潜水艦は水面上にある時は重油の爆發を利用するるので、かの自動車の發動機を大きくしたやうなディーゼル機關によつて推進されるのでありますが、潜航の際には電力がそれに代るので、す、そして、その電力は船の底に積んである二百あまりの大型の蓄電池から取るのです。やがてどこともなく大きな瀧の

tank

やうな水音が聞えて來ます。これは、タンクの口が一時に開かれて海水がその中に漲り込む響です。この艦は全體が二重に出來てゐて、外側は水切りのよい形の船體ですが、内側はこの司令塔の下に前後に横たはつてゐる丈夫な鋼の筒なのです。まづ藥を刻む藥研の中にお茶の罐を入れて蓋をしたといふ形でせう。その内側と外側との間の大きな場所が、全部タンクになつて居り、艦首から艦尾までの間がいくつもの部分に仕切られて、その一つ／＼に、水の入る口と空氣の逃げ出す穴とがあります。それが今「潜航」といふ命令で、その口が開かれたのですから、海の水がどしどし二重船體の間に流れ込んで、艦の重さが刻々に増して

來ます。そしてそのタンクがいつぱいになると、ちやうど鯨や龜の身體のやうに、水と同じ重さになり、飛行船がフワリフワリと空中を歩くのと同じ工合に、水の中で自由に浮き沈みが出来ゝやうになります。

かくしてほんの束の間、一分と經たない中に、私どもは魚になつてしまひました。水の上に残るものは、たゞ太さ二寸位のペリスコープの先が二三寸ばかり、それが始終波の間に見え隠れして居りますが、その頂上にレンズの装置があつて、それに映ずる海上の有様をば、反射鏡の作用によつて、艦長は水面下に没した司令塔内に居りながら、手に取るやうに見ることが出来るのです。

ほんの束の間、
一分と經たない
中に、私どもは
魚になつてしま
ひました。

periscope.

二三寸

一寸は約三センチ。

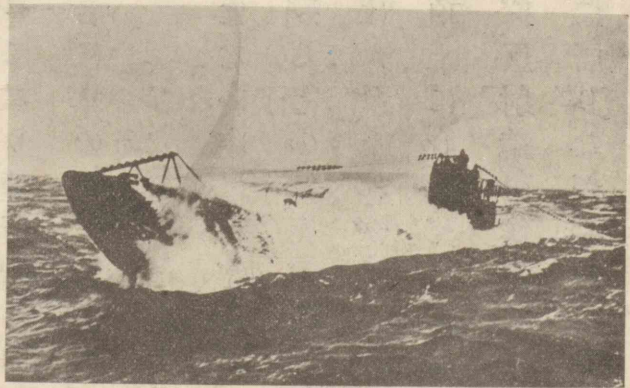
lens.

百呎
一呎は約三十七
センチ。

handle.

propeller.

突然司令塔から「深さ百呎^{フィート}急げ！」といふ命令が來ました。同時に、水平舵のハンドルが忙しく廻され、これにつれて、深さを示す針が六十、七十、八十とぐんぐん進んで行きます。その中に頭の上で遠雷のやうな音が、次第に遠く消えて行きました。敵の驅逐艦のプロペラの音です。我が潜水艦は、敵艦を護衛するため、その前方遙かに進んで來るこの小さい敵には目もくれず、また幸に見つからずに、その下をうまくと潜り抜け



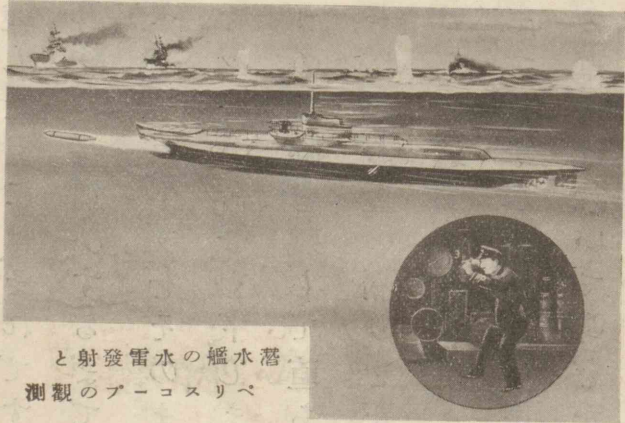
艦水潜るすとんせ行潜に將

敵に肉迫する。

威風堂々と海を
壓して進んで來
る。

四方の海面を電
光のやうに見て
取りました。

たのです。やがて「浮き上れ、深さ五十呎、急げ！」の號令がかりました。いよ／＼浮き上つて敵に肉迫する時が來たのです。艦は百呎の海底から一氣に浮かび上つて、ペリスコープの先が水の上に出るや否や、艦長の目には、威風堂々と海を壓して進んで來る敵の大軍艦の姿が映りました。映ると同時に、艦長はグルリと身を廻して、四方の海面を電光のやうに見て取りました。艦長はペリスコープの先が海面に出る度毎に、チラ



と射發雷水の艦水潜
測觀のプーコスリベ

魚雷は、艦に僅かばかりの震動を残して直ちに飛んで行きま

リチラリと敵を見るだけですが、熟練した目には、それですべてが解るのです。やがて艦長の身體が身震ひするまでに引締つたと見ると、今度は上げたペリスコープをそのままジイッつと前方を睨みながら、「打てッ！」の命令を下しました。四本の魚雷は、艦に僅かばかりの震動を残して直ちに飛んで行きました。魚雷は整へられたお互の隔りを正しく保つて、眞直に敵の横腹を目がけて突進して行きます。壓搾空氣で走らす魚形水雷の吹き出す泡が、水面に白い尾を曳いて進んで來たのに驚いた敵の軍艦は、急いで身をかはさうとしましたが、大きな身體は、さう身輕には動きません。その中に、「深さ百五十呎急げ！」の命令が下りましたが、

シーンとして耳を澄ましてゐた誰もが、思はずドッと勝鬨を上げました。

水雷の不意打に痛手を負つた敵艦が、見えない敵に無念の齒がみをして、水雷が來た方の海面を盲打ちに射撃して、死物狂ひの一人相撲を取つてゐるので

この艦長の命令が終るか終らない中に、續け様に二度、船の全體がビリ／＼と震動して、雷のやうな大音響が水を傳はつて聞えました。シーンとして耳を澄ましてゐた誰もが、思はずドッと勝鬨を上げました。四本の水雷の二本が見事敵艦に命中したのです。潜水艦はグッと前かゞみになつてぐん／＼と潜つて行きます。その時頭の上で、鐵板を鐵槌で叩くやうなガン／＼といふ音が聞え出しました。水雷の不意打に痛手を負つた敵艦が見えない敵に無念の齒がみをして、水雷が來た方の海面を盲打ちに射撃して、死物狂ひの一人相撲を取つてゐるのです。しかし水面にぶつかつて破裂する彈が我々に與へる結果は、たゞそのガン

ガンといふ音だけです。その間にも沈み入つた深さが次第に増して百呎を越えた時、彈の響がピタリと止むと共に、今度は石臼を挽くやうな音が、これに代つて聞えました。水の中では物音が空氣の中より遙かによく聞えます。この薄氣味悪い響は、先に見た數隻の驅逐艦が追ひ迫つて來たのです。我が艦の中に備へつけた水中の音を聞く受話器には、猶ほはつきりとこの音が傳はりますが、敵の驅逐艦も同じくその受話器に耳を澄まして、我が艦のプロペラの音を頼りに追つて來ました。それが、今船の直ぐ上に来て、親の仇この下にありと突き止めたのです。その瞬間に、音といふか、震動といふか、ピンと身體を鞭で打たれたやうに

艦は物に驚いた馬のやうに狂ひ出しました。

七轉八倒するばかり。

名人の手綱捌きもかくやと思はれるばかり。

感ずると共に、艦内の電燈は一時に消えて、艦は物に驚いた馬のやうに狂ひ出しました。驚く間もなく、右にも左にも、その恐しい響が續け様に起つて、今は全く瀧壺に落ち込んだ小魚同様、ゴウ／＼と唸る水音と渦巻く波とに、七轉八倒するばかりになりました。敵が潜水艦の大禁物なる、水中で破裂する爆彈を投げ込み出したのです。この時、あなた方はつく／＼、勇敢な軍人の落ちつきといふものに感心されるでせう。御覽なさい、電燈が消えたと思ふと、要所々々にはパツと携帯電燈が灯されました。艦長の命令には少しも慌てた様子がありません。名人の手綱捌きもかくやと思はれるばかり、どこまで荒れ出すかと思つたこの艦も、

機敏な人々の働により、まんまと乗り鎮められて、一息に二百呎の深海に潜り込みました。その中に、敵の矢種も盡きたらしく、もう爆弾の音も聞えなくなりました。

水雷を發射してからもう三十分、たしかに手應へはありましたが、その後の様子が心懸かりです。新式の大軍艦は二三發の水雷で必ず沈むものとは限りません。やがて「靜かに浮き上れ！」の命令が下りました。艦は希望と不安との境をたどりながら、一尺々と靜かに浮かび上つて行くのです。そしてペリスコープの先がヌッと海面に出た時に、艦長の口許には會心の微笑が浮かびました。そして艦は再び深く水中に潜つて、この戰場を遠く離れましたが、や

一尺
約三十センチ。

艦長の口許には
會心の微笑が浮
かびました。

mast
antenna.

がて壓搾空氣でタンクの水を吹き拂つて、悠々と水面に浮かび出てました。

この時です、高々と押立てられるマストの先のアンテナから、今日の手柄が放送されるのは。

二六 春寒き多摩御陵に詣でて

九條 武子

如月の春まだ浅い日曜の晝、私たちは浅川の御陵奉拜のために、道を甲州路に取つて自動車を走らせた。曇つた空は薄日もささず、立ち迷ふ雲の往來も、けふの心持に似て、何か知らず物寂しい。

九條武子

歌人

男爵九條良致氏

夫人

京都の人

昭和三年(二五六)

歿年四十二

如月

昭和二年二月

浅川

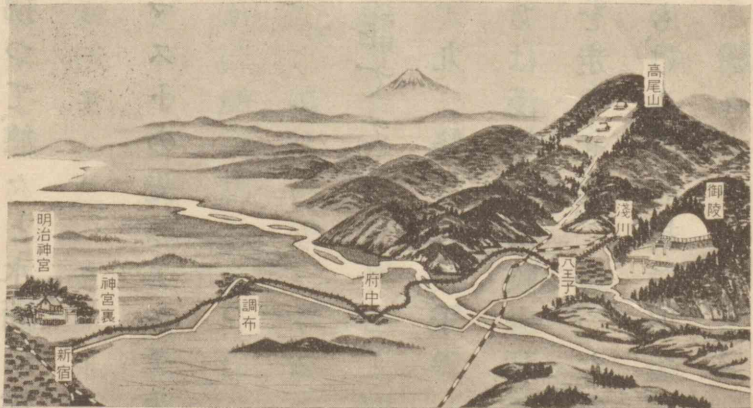
東京府西多摩郡にある。

甲州街道
東京市新宿から
山梨縣甲府市に
至る街道の稱。

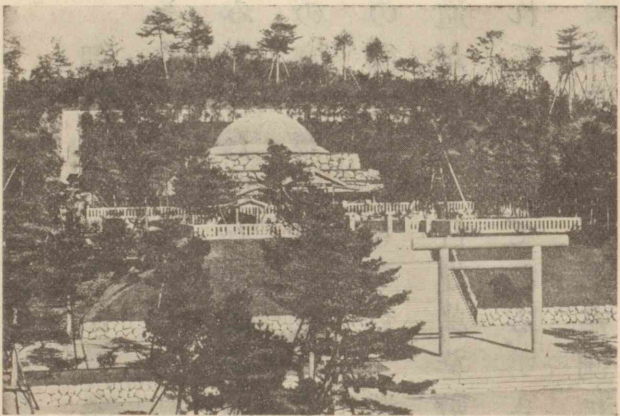
八王子市
東京市の西に當
り、東京府南多
摩郡にある。

甲州街道は、良い道であつた。自動車は都の北、平坦な長い道を靜かに走つてゆく。過ぎてゆく沿道の村々は、春の訪れもおくれて、まだ、冬籠の寂しい色につままれてゐた。

八王子市の郊外に近づくと、一面の桑園である。今は知らず、昔は機織り暮したでもあらう家々の女等の仕事か、ゆかしくもまた懐かしいものと偲ばれる。村々を眺めてやゝ落ちついた眼



京王電車
東京市四谷區新
宿から八王子市
に至る電車。



多摩御陵

に、市の店頭が急に花やかに映る。新宿からの京王電車は、こゝまで延びてゐる。こゝから浅川までは乗合自動車の便もあるが、乗客はいづれも御陵参拜の人たちであらう。何團體、何青年團の、紋服のもの、制服のものなど、お参りの人足は、こゝから浅川まで、間斷なくつゞいてゐた。御大葬のその夜、八瀬の童子がつかへまつた葱華輦渡御の御有様を偲びつゝ、やがて東浅川橋を渡る。

一町
約百九メート
ル。

御名代の宮様
秩父宮殿下。

浅川の河原の石もひとつびとつ泣きぬれにけむ
 みはふりの夜を
 御門を通つてから參道十數町の間には、鯨幕くじらまくらが嚴かに引
 きわたされ、幾百基の高張提灯が、先つ夜のまゝなのも、哀し
 みを新たににして、胸の閉ぢらるゝ思がした。御若き御名代
 の宮様が、あの寒夜を父帝の御喪主と立たせられ、御悲しみの
 御足どりも重たう進ませられたであらう、淨き玉砂利の
 道が、今は一日幾萬を數へる國民が參拜の群に踏み固めら
 れてゐるのである。

第二の御門の左側にある參集所で、姓名を通じ、そこで手
 を淨め口を嗽ぎ、守部しゅぶの人に導かれて、御柵内に參進した。

神域にはぐかり
ある心地。

御幕の内には、近衛の兵士が、御靈を御守り參らせてゐた。
 御鳥居を距る數歩の前に參進、そこで誠をこめて拜し奉つ
 た。かしこき御靈のとしし
 へに神鎮まりたまふ御前と
 思ふと、おほけなさにおのづ
 から頭かしらも垂れて、ひたすらに
 心からの合掌をさゝぐるの
 みであつた。

みささぎのほとりま近うおほけなくをろがみま
 つる今日のかしこさ
 私たちは大まへの清らかな砂利を踏む足音も、神域には



九條武子

ばかりある心地さへしつゝ、もとの參集所まで退いた。し
かしこのまゝおいとま申し上げることは、何となく御名殘
が惜しまれて、今度は、一般參拜の人たちの列に入つてもう
一度拜觀した。

大まへの左側に葱華輦が安置されてゐた。

にび色のたれ帛おもしみすぬちの大みひつぎを

思ふしぬびまつるも

八瀬のわらべ幸こそありけれいやはてのみとも

つかふる民多きなかに

先に拜した御鳥居、祭場殿を、尙ほもしみと拜し奉る
と、そこには日像、燾旛、月像、燾旛を兩側にして、鉦鼓、御弓、大眞

榊も奉られてあつた。祭官はこゝに日供を御供へ申し上
げるのであらう。

日のみはた月のみはたのならびたてり祭場殿の

その夜をしおもふ

incline

靈柩をあげまゐらせたインクラインも、今は綺麗に芝生
を以て蔽はれてゐた。その高い上に、玄宮がなかば半月形

に仰がれる。御須屋の扉は固く鎖されて、御靈は永劫に長

房山の丘に、御安らけく鎮まりますのであつた。

短き私たちの生涯に於て大君の永劫の大行幸を二度ま

でも送り奉ることは、何にたとへやうもない悲しき極みで

あるが、同時に泣いてもく、泣き切れぬ奉悼の裡にしみじ

長房山

多摩御陵所在の
山。東京府南多
摩郡淺川村にあ
る。

二度の大行幸

明治天皇崩御
大正天皇崩御

安田高等女学校
第一学年

和上清子

昭和八年七月二十八日印刷
昭和八年七月三十一日發行
昭和八年十二月六日訂正再版印刷
昭和八年十二月九日訂正再版發行

純正女子國語讀本 卷四

定價金 六十錢



編纂者 五十嵐 力

發行者 早稻田大學出版部

代表者 武田 尾吉

東京市牛込區櫻町七番地

印刷者 五十嵐 良晃

東京市牛込區櫻町七番地

◆發行所

東京市澁橋區戸塚町一丁目五十八番地

早稻田大學出版部

電話牛込三四五番・三四六番

日清印刷株式會社印刷

輝く新日本の建設。

挽歌。

みと偲び奉るは、量り知られぬ御恩徳である。私たちは、御恩徳に對し奉り、たゞ報謝の誠をさぐらるのみである。御詔の御示し給ふまゝに、新帝の良き民として仕へ奉り、輝く新日本の建設に努力するより外に、私たちの進むべき道はない。

櫟の雑木林は黙して立ち、夕べ近き淺川の里は、靜かに喪にこもつてゐるやうであつた。やがて冬枯の武藏野に春の光が訪れて、小鳥らも御陵のほとりに、可憐な挽歌をさげ參らすることであらう。

純正女子國語讀本 卷四 終



安田高等女子学校

第二号子外

有子清子

安田高等女子学校

二年中村ト三工